

『満洲通信』に見るハルビンの  
ウクライナ人 1932-1937年

岡 部 芳 彦

神戸学院経済学論集

第52巻 第3・4号 抜刷

令和3年3月発行

# 『満洲通信』に見るハルビンの ウクライナ人 1932-1937年

岡 部 芳 彦

## 要約

満洲のウクライナ・ディアスポラについて一次史料を用いた研究は、これまでほとんど行われていない。本稿では、1932年8月から1937年8月までハルビンで発行されていたウクライナ語週刊新聞『満洲通信』を用いて、ハルビンを中心に満洲のウクライナ人の実態を分析した。そこから浮かび上がってきたのは、ハルビンには、これまで一括りにされていた「白系露人」の中に、ウクライナ人の一大コミュニティが存在していた可能性である。一方、ハルビンのウクライナ人社会では、個々人や団体によってその民族意識に大きな温度差があったことも分かった。ハルビンのウクライナ人社会は一体ではなかったと考えられる。ハルビン特務機関が、検閲が難しいウクライナ語の新聞の発刊を許していたことから少なくとも1937年まで、ハルビンの民族意識の高いウクライナ人と日本当局が密接な関係にあったことが窺える。たとえ日本の傀儡国家であっても、ロシアでも中国でもない満洲国で、ウクライナ独立を夢見て力強く生きるウクライナ人が多数いた。また、彼らの活動を陰ながら支えた多くの日本人もまた存在していたのである。

## 1 はじめに一緑ウクライナのウクライナ人—

本稿の目的は、満洲国のハルビンで発行されていたウクライナ語新聞『満洲通信』の紙面を分析して、在満ウクライナ人の実態を明らかにすることである。

20世紀初頭に極東に移民したウクライナ人は満洲にも移動し「緑の楔（緑ウクライナ）」と呼ばれた居住区が形成された。近年、緑ウクライナや満洲を含む中国に住んだウクライナ人の研究も現れている。ロシアの研究者B・チョル

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

ノマズの『緑の楔：ウクライナ人の極東』は、極東のウクライナ系ディアスポラの事項を網羅する百科事典形式の労作である。<sup>(1)</sup>ウクライナの中国史家であるO・シェフチェンコの1920年代までのハルビンにおけるウクライナ人コミュニティの研究も進んでいる。<sup>(2)</sup>

本章の史料は、1932年8月から1937年8月までハルビンで発行されていたウクライナ語週刊新聞『満洲通信』である。現在、現存が確認されているのは、ニューヨーク市立図書館のマイクロフィルムと在米ウクライナ自由科学アカデミーの資料群イヴァン・スヴィット・フォンドに所蔵されている史料のみである。日字内外においても、この新聞紙面を使用した体系的な研究はこれまでなかった。一方、膨大な量であり、本章のみですべての紙面を紹介し、全容を説明することはできない。そこで、以下の点について検討する。まず『満洲通信』の編集者であったイヴァン・スヴィットの手記『日本とウクライナの相互関係』<sup>(3)</sup>を参照しつつ、創刊の経緯から廃刊に追い込まれるまでの概要をまとめる。次にスヴィットと関係があった日本人について検討する。最後に『満洲通信』全号の1面記事から一覧を作成し、各年の動向を参照しながら代表的な記事を

---

※本稿の執筆にあたって、ビャチュスラフ・チェルノマズ氏が在米ウクライナ自由科学アカデミー所蔵の『満洲通信』の全画像を提供いただいた。ここに記して謝意を表したい。

- (1) *Чорномаз В. Зелений Клин (Український Далекий Схід) / В'ячеслав Чорномаз. – Владивосток: Видавництво Далекосхідного федерального університету, 2011.*
- (2) *Шевченко О. М. Український Харбін/ГОЛОВНА ПУБЛІКАЦІЯ Журнал Україна-Китай N3(9) 2017.*
- (3) イヴァン・スヴィットについての研究は、近年、ウクライナでも現れ始めている。

*Лях Р. Японія у житті та науково-публіцистичній спадщині Івана Світа (1897-1989) // Вісник Львівського університету. Серія філологічна. – 2017. また、日本語で読めるものとしては、以下のエッセイがある。中井和夫「アメリカのなかのウクライナ、そして日本」『窓』45号、ナウカ、1983年、オリガ・ホメンコ「東アジアのなかのウクライナ イワン・スヴィットの足跡をおって」『ロシア文化通信 群GUN』54号、2019年。*

取り上げ、スヴィットの手記とも照らし合わせて分析する。これらによって、ハルビンのウクライナ人が何を考え、どのように暮らしていたのか、また日本人とどのような関係であったのかその一端を明らかにしたい。<sup>(4)</sup>

## 2 『満洲通信』とイヴァン・スヴィット

### (1) 『満洲通信』概要—創刊から廃刊まで—

『満洲通信』は、シェフチェンコ兄弟商会のイヴァン・シェフチェンコの資金援助を受けて1932年8月5月に創刊された。<sup>(5)</sup>1500部が中国人の印刷業者によって刷られ、同日に路上で販売された。一方、この創刊号は満洲当局から販売許可を得ていなかったため、販売を一時的に禁止された。印刷費が高額で、また有料広告主を見つけるのが難しかったため9月12日に一時休刊に追い込まれ、以後不定期に発行されたが、1933年1月末より復刊し、重複した号数があるものの1937年の200号まで途切れることなく発行された。<sup>(6)</sup>

1933年の後半に、ハルビン警察と日本当局の検閲官との打ち合わせが行われたが、満洲国が「五族共和」を謳っており、ハルビンではロシア人が非常に多いため、『満洲通信』での反露的な表現に対する懸念が示された。一方、ロシア人が検閲を行うため、記事はロシア語と英語のみとされたが抗議の結果、ウクライナ語での発行も許された。<sup>(7)</sup>

紙面の特徴としてはウクライナ語の記事を中心に、ロシア語、英語の記事が掲載された。創刊号からウクライナ語で発行されていたリヴィウの『ディロ』紙、<sup>(8)</sup>パリの『トルィーズブ』紙、<sup>(9)</sup>リヴィウの『スヴォボーダ』紙からの記

---

(4) ハルビンの表記については、カタカナの場合はハルビンとし、漢字については、出典や当時の団体名に準拠して記載する。

(5) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 111.*

(6) 紙面の広告などから考えると、華豊印刷局で印刷されたようである。『満洲通信』12号（137号）1936年5月3日、4面に広告がある。

(7) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 120.*

(8) 『ディロ』（«Діло»: 要務）はガリシア地方を代表する新聞であり、最も古いウ

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

事も転載された。

記事の内容については、ウクライナや満洲のウクライナ人に関する内容のほか、グルジア人やタタール人、また回教関係記事も掲載された。例えば、1935年10月に神戸でモスクが建立された記念に、アブドル・アジズ元全インド・ムスリム連盟会長が出席して盛大な式典が開催された記事もある<sup>(11)</sup>。また、満洲だけではなく上海や青島のウクライナ人団体の広告なども多数掲載されており、満洲や中国のウクライナ人コミュニティを知る上で貴重な史料である。

1935年頃から日本当局の検閲が強まった。理由としては1934年末に設立された白系露人事務局の干渉があった。同年11月7日には厳しい検閲を受け、12月初頭には複数の記事が発禁処分となったが、満洲国の中華系裁判官によって再発行を許可された。<sup>(12)</sup>

---

クライナ語の日刊紙。ディロは1880年から1939年にかけてリヴィウで出版された。ロシアによるガリシア占領時（1914-15）、およびウクライナ軍の撤退後のポーランドによるリヴィウ支配（1918年11月29日から1920年）の間は発行が中断された。前者の間、ディロはウィーンで短期間、毎週発行された。1939年9月1日の第二次世界大戦勃発後、ソ連軍がリヴィウに入った後に編集部が閉鎖された。Canadian Institute of Ukrainian Studies, *Internet Encyclopedia of Ukraine*, (URL: <http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?linkpath=pages%5CD%5CI%5CDiloIT.htm> 最終閲覧日：2020年5月12日)。

(9) 『トルィーズブ』紙 («Гризуб»: 三叉戟)。1925年10月15日から1940年までパリで発行された政治、市民、歴史、文化の週刊誌（全705号）。ウクライナ人民共和国亡命政府の非公式機関紙。Canadian Institute of Ukrainian Studies, *Internet Encyclopedia of Ukraine*, (URL: <http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?linkpath=pages%5CT%5CR%5CTryzubIT.htm> 最終閲覧日：2020年5月11日)

(10) 『スヴォボダ』紙 («Свобода»: 自由)。1897年から1919年と1922年から39年にリヴィウで発行された政治経済問題の新聞。ディロに次いで、ガリシアで最も長く続いたウクライナ語新聞。発行部数は、1897年に1,850、1912年に6500、1913年に9500、1917年に8500、1930年に2350であった。Canadian Institute of Ukrainian Studies, *Internet Encyclopedia of Ukraine*, (URL: <http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?linkpath=pages%5CS%5CV%5CSvobodaLvivIT.htm> 最終閲覧日：豪2020年5月12日)

(11) 『満洲通信』30号（122号）、1935年11月7日、3面。

(12) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 187.*

1935年2月からは日本当局の要請でハルビン・ラジオ局のウクライナ語放送で使用するための原稿も『満洲通信』のスタッフが作成した。夕方に放送が行われた。同年3月9日に放送された最初の放送は、3月9日のタラス・シェフチェンコの誕生日を記念して行われ、7～8分のニュースとコンサートの中継で構成された。<sup>(13)</sup>

1937年8月8日付の『満洲通信』第200号は印刷されたが、当局の検閲が得られず、販売ができなかった。1938年3月末に、満洲国國務院内務局から『満洲通信』の清算の命令が出されたため、同紙の発行を停止する申請書を提出することを余儀なくされ、その歴史に幕が下ろされることとなった。<sup>(14)</sup>

## (2) 編集者イヴァン・スヴィットと日本人

表1は、スヴィットが接触した日本人を年代順にまとめたものである。スヴィットの著作には姓のみ記載されていることが多く、スヴィットの記述以外で名や所属が確認できない場合が多く、その場合は姓名をカタカナで記載している。一方、その他の史料と照合して可能なかぎりで官姓名や所属を付記した。<sup>(15)</sup>

最初期に関係があったのは杉原千畝であった。1922年にハルビンに移住したスヴィットは同地の日本総領事館員であった杉原とは1924年から親交があった。杉原は1926年に中国当局によって接収されていたウクライナ民族の家の建物<sup>(16)</sup>（ウクライナ・クラブ）の返還に尽力した。

---

(13) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 153.*

(14) *Так само... - С. 247.*

(15) 例えば、南満洲鉄道関係者の場合は以下の史料を確認した。南満洲鉄道編『職員録. 大正15年7月1日現在』、『職員録. 昭和2年7月1日現在』、『職員録. 昭和3年1月1日現在』、『職員録. 昭和4年3月1日現在』、『職員録. 昭和5年8月1日現在』、『職員録. 昭和6年9月1日現在』、『社員録. 昭和8年9月1日現在』、『社員録. 昭和9年9月1日現在』、『社員録. 昭和9年9月1日現在』、『社員録. 昭和10年12月1日現在』、『社員録. 昭和10年12月1日現在』。なお、表1には今後の研究の参考として、本書の対象である1937年以降も含めている。確定できなかったが可能性がある氏名や事項については備考欄に疑問符をつけた。

図1 ウクライナ民族の家（左端の旗の立つ建物、右端は日本総領事官邸）



【出典】絵葉書「哈爾濱義州街より馬家溝の遠望」（岡部蔵）。なお同じ写真は藤井金十郎編『哈爾濱写真帖 Views of Harbin』日信洋行，1941年，藤井金十郎『哈爾濱と風俗（現地写真集）』日信洋行，1943年にも収録。

杉原とスヴィットの仲介役となったのは、南満洲鉄道哈爾濱事務所の軍司義男と福井敬蔵であった。20年代から30年代初頭にかけてのスヴィットの日本人脈は南満洲鉄道哈爾濱事務所関係者が中心である。例えば、南満洲鉄道哈爾濱事務庶務課勤務を経て、『ハルビンスコエ・ウレーミヤ（哈爾濱時報）』を創刊した大澤隼は、1933年頃に、ウクライナ関連ページを設けるなドスヴィットらウクライナ人を支援した<sup>(17)</sup>。その中でも、堀江一正の存在は非常に大きかった<sup>(18)</sup>。

(16) ウクライナ民族の家は、シェフチェンコ兄弟商会のイヴァン・シェフチェンコらの支援を受けて、1918年に建設が始まり1920年に完成した。Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 111. ノヴォトルゴバヤ通（新商務街，義州街）9番地あり，日本総領事官邸の向かいにあった。現在，同地には哈爾濱第17中学校（果戈里大街319号）が建っている。

(17) Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 142. なお，東京外国語学校露語科の先輩でもあった古澤幸吉によれば，大澤隼は「国士的タイプ」であり，昭和初期の国家改造主義運動のリーダーであった西田税を財政的に支援するため，1934年9月頃に旅順要塞で，日露戦争の際にロマン・コンドラチェンコ将軍が埋め

図2 大澤隼



【出典】河合静子氏蔵（1938年2月パリのモンスリー公園で撮影）

スウィットによれば、堀江は極東地域に駐屯した日本陸軍の将校であったがそこに住む沿海州のウクライナ系の女性と結婚したため軍を追われることになっ

---

たとされる金塊を掘り出そうとした。二・二六事件の際には西田や北一輝に資金を提供した容疑で、南満洲鉄道社員でロシア研究者の島野（嶋野）三郎らとともに哈爾濱憲兵隊に拘束され取調べを受けた。一方、大澤の子女である河合静子氏によれば、大澤は東京で二・二六事件の取調べを受けた後、一度ハルビンに戻り、島野とともにパリとロンドンへ向かった。古澤幸吉に『ハルビンスコエ・ウレーミヤ』紙を引き継いだ後、北京で華北交通株式会社の参与として調査3課に勤務し、終戦まで総裁の宇佐美寛爾が住む予定であった第2公邸に住んだ。戦後は、島野の住む東京の阿佐ヶ谷にロシア料理店「ミシカ」を開いた。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C01003113700（第1～4画像）「旅順金塊問題の件／昭和11年 陸満密綴 4.12-4.22」（防衛省防衛研究所）。古澤幸吉著、古澤陽子編『古澤幸吉自叙伝「吾家の記録」：村上・厚岸・東京・ハルビン』古澤隆彦発行、2016年、pp. 237-238。東京陸軍軍法会議予審官陸軍法務官作成「大澤隼、島野三郎、二・二六事件に関する件照会（作成日1936年6月5日）」『オンライン版二・二六事件東京陸軍軍法会議録第一部』00373100-0057。

(18) スウィットが堀江同様に親しかったと述べた北川鹿藏については、本書第3章、または「満洲の〈ウクライナ運動〉：忘却された日本・ウクライナ関係史」『アリーナ』2017年を参照。



『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

た。(ナディアさんへ；脚注を削除しました) その後、南満洲鉄道哈爾濱事務所を経て満洲国外交部職員となった。<sup>(19)</sup> 堀江については、1931年、参謀本部の幹旋で「和歌山歩兵連隊附少連邦実習将校ポクラドク」<sup>(20)</sup>の通訳として採用された際、警視総監や和歌山県知事名で作成された調書からさらに詳しい経歴が確認できる。

## 一、経歴

明治廿七年陸軍中央幼年学校予科入学露語ノ研究ヲナシ大正元年陸軍士官学校卒業、同十二月任陸軍歩兵少尉近衛歩兵第一聯隊附被命、大正七年五月露語研究ノタメ陸軍省ヨリ露領「イルクーツク」市へ派遣セラレ大正七年西伯利出兵二際シ野戦交通部員トナリ引続キ「イルクーツク」市ニアリタルカ大正八年浦汐野戦交通部本部に転任シ中尉二昇進シ大正十一年予備役二編入セラル、一時帰朝ノ上同年満鉄哈爾濱事務所情報主任二就職シ大正十二年三月同地ニ亡命中ノ露国女性「アナスタシヤ・チヤリキナ」ト正式ニ婚姻シ昨年八月大連所在<sup>(21)</sup>満鉄本社交渉部二転シ同年末解職現在二至ル

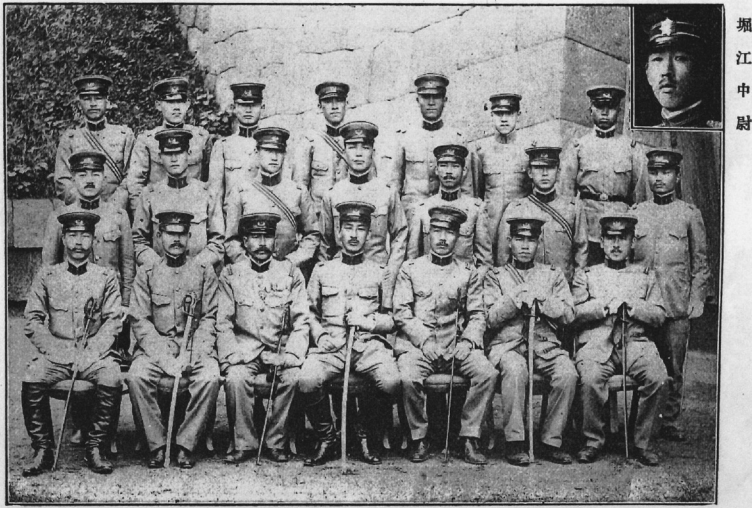
---

(19) ただし、満洲国の官吏名簿では確認できなかった。確認した史料は以下である。満洲国国務院総務庁編『満洲国官吏録。大同2年6月30日現在』1933年、『満洲国官吏録。康德元年12月1日現在』1935年、『満洲国官吏録。康德2年12月1日現在』1936年、『満洲国官吏録。康德2年12月1日現在』1936年、『満洲国官吏録。康德4年4月1日現在』1937年、『満洲国官吏録。康德5年4月1日現在』1938年、『満洲国官吏録。康德6年4月1日現在』1939年、『満洲国官吏録。康德7年4月1日現在』1940年。

(20) ミハイル・キリロヴィチ・ポクラドク。のちに赤軍参謀本部諜報局第2部日本課長となった。1938年8月粛清(銃殺)、1957年名誉回復。Расстрелянное поколение: 1937-й и другие годы. Биографический справочник. (URL: <http://1937god.info/node/678> 最終閲覧日: 2020年6月2日)

(21) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04013111400 (第53, 54画像) 「要視察人関係雑纂／本邦人ノ部 第八卷／12. 堀江一正」(I-4-5-2-2\_008) (外務省外交史料館)

図3 堀江一正（右上別枠）



【出典】近衛歩兵第1連隊第1大隊の将校の集合写真。帝国聯隊史刊行會編『近衛歩兵第一聯隊史』帝国聯隊史刊行會，1918年（靖国偕行文庫蔵）。欠席者扱いであることから、イルクーツクでロシア語留学中と思われる。

また、陸軍士官学校第24期生の卒業50周年を記念して刊行された『追悼録』<sup>(22)</sup>では、同期生であった目賀田周之助が、「堀江一正君：人間としての責任に殉じた人」と題した追悼文を書いている。それによれば、堀江の父は日露戦争で戦死した連隊長であり、士官学校卒業後、目賀田とともに近衛歩兵第1連隊に配属された。<sup>(23)</sup>シベリア出兵時に「白系露人A女と同棲、一児を挙げたのが帰還後問題」となった。陸軍当局はその婦人と別れば問題なしとし、目賀田を説得に当たらせた。しかし「此處まで来て彼の母子を見捨てたのでは、日本の

(22) 最終階級は陸軍少将。俳人目賀田思水としても知られる。陸士第二十四期生会編『追悼録』1962年、26～27頁。鈴木亨編『帝国陸軍将軍総覧』579頁。

(23) 明治38年3月奉天会戦における沙汰子（さだし）の戦場で戦死した歩兵第42連隊長の堀江不可止中佐と思われる。

(24) 堀江は第1大隊第2中隊、目賀田は第3大隊第12中隊であった。帝国聯隊史刊行會編『近衛歩兵第一聯隊史』帝国聯隊史刊行會，1918年，2頁。

図4 南満洲鉄道哈爾濱事務所職員の集合写真（1925～29年頃）



【出典】古澤隆彦氏蔵。前列左から3番目が北川鹿蔵，2列目左から3番目（北川の右後方）が堀江一正と思われる。前列右から5番目は古澤幸吉所長

将校として如何にも無責任と信ずるから、寧ろ潔く退官の道を選びその責任をとる」と答えた。その後、堀江はロシア語を生かして南満洲鉄道で活躍したが、昭和初期に日本に一時帰国した際、その夫人が到着した日に急逝し、新年早々に神田のニコライ堂（東京復活大聖堂）で葬儀を行った。その数年後に日中戦争に応召、天津で勤務していた際に目賀田と再会、戦後は東京の淀橋に住んだが、腸を病み病没した。<sup>(25)</sup>

(25) 陸士第二十四期生会『追悼録』1962年，25頁。また南満洲鉄道時代の上司であった古澤幸吉が1941年11月、天津の白系露人の情況視察をした際に調査資料を提供している。古澤幸吉著、古澤陽子編『古澤幸吉自叙伝「吾家の記録」』245頁。また、古澤幸吉の住所録『新知人名簿』と大澤隼が自身の葬儀のために残したメモによれば、戦後は、少なくとも1951年頃までは新宿区柏木に居住したようである。

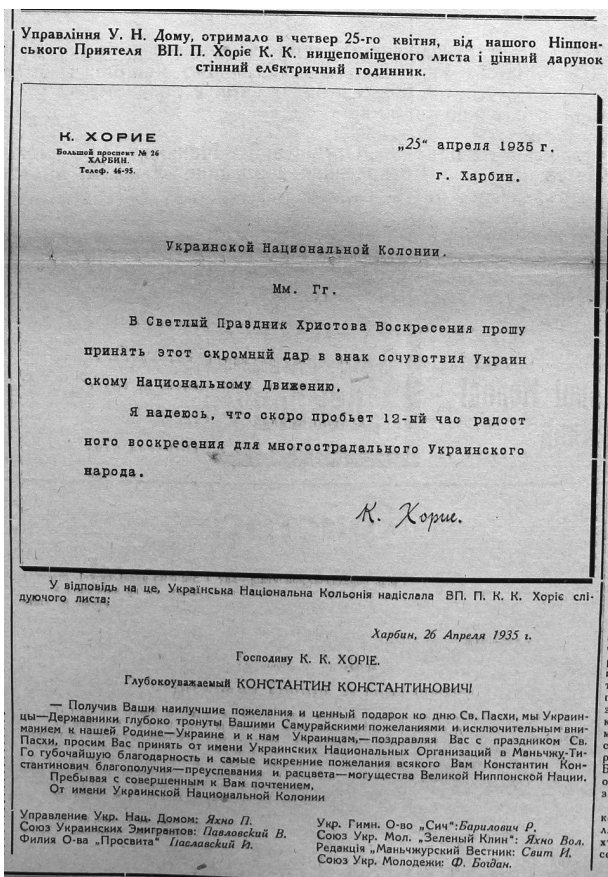
満洲におけるウクライナ運動の支援者としての堀江の存在については前章でも触れたが、『満洲通信』の紙面からは、その深い関係の背景が分かる。1935年4月28日号では堀江からウクライナ人居留民会宛てに復活祭を祝って送られた手紙が掲載されている。その下には、ウクライナ民族の家代表の П・ヤフノ、ウクライナ移民連盟 В・パプロフスキー、プロスヴィータ協会 И・パスラフスキーの連名での返礼が掲載されている。スヴィットによれば堀江は正教徒であったが、この返礼の宛名から、洗礼名コンスタンティン・コンスタンティノヴィッチであったことが分かる。1937年1月10日号では、堀江の妻 Л・Ф・ホリエが1937年1月1日に東京で死去した記事<sup>(26)</sup>、また1937年2月7日号では、2月9日にパナヒダ（パニヒダ、正教の死後40日祭）を行う告知記事が掲載されている。ハルビンの満洲国や日本軍高官など著名人を除いて、日本人からの手紙やその妻の死去について報じた記事は『満洲通信』の発行期間を通じて存在しない。そこからは堀江とスヴィットやハルビンのウクライナ人コミュニティとの深い友情関係が窺える。

堀江は、スヴィットを初めとするハルビンのウクライナ人と日本当局との仲介役であるとともに、「日本軍事使節」との連絡員であった。「日本軍事使節」とは柳田元三大佐がトップであったと書かれているため、ハルビン特務機関を指すことが分かる<sup>(27)</sup>。1930年代以降、スヴィットが接触を持った日本人の多くは、日本軍・ハルビン特務機関の関係者であった。1932年5月に、ハルビン特務機関でウクライナを担当していたタナカ大尉に『満洲通信』創刊の相談をするた

(26) 『満洲通信』2号(172号), 1937年1月10日, 2面。『要視察人関係雑纂』の堀江の妻の名前は「アナスタシヤ・チャリキナ」、また目賀田は「A女」と書いており、名前と父称のイニシャルは『満洲通信』の記事と一致しない。一方、ハルビンのロシア語新聞『ザリャー』の死亡記事では、「リュドミーラ・フェドロヴナ・ホリエ」と記載されており、『満洲通信』と一致している。Незабытые могилы. Российское зарубежье: некрологи 1917-1997. Том 6. Книга 3. Х-Я. / Рос. Гос. б-ка; сост. В. Н. Чуваков; под ред. Е. В. Макаревич. - М.: Изд-во «Пашков дом», 2007. - С. 88.

(27) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 333.*

図5 K・ホリエからウクライナ人居留民会への手紙と関係団体からの返信



【出典】『満洲通信』11号（103号），1935年4月28日，2面。

め第10師団司令部を訪問した際に、司令部にいた橋本欣五郎中佐にロシア人と間違われ叱責された。三月事件、十月事件を計画し失敗した橋本は、北満派遣を控える姫路の野砲兵第10連隊付となり、ハルビン到着後は師団参謀部で宣撫工作などを担当する「特班」の班長となっていた。スヴィットは自分がロシア

(28) 田々宮英太郎『橋本欣五郎一代』芙蓉書房出版，1982年，190～191頁。



図6 『満洲通信』から K. K. ホリエへ妻 Л・Ф・ホリエのお悔み記事



【出典】『満洲通信』2号(172号), 1937年1月10日, 2面。

人ではなくウクライナ人である旨を伝え、冷静になった橋本からはウクライナ独立運動などについて質問が飛び、長時間話し合った。その後、橋本から『満洲通信』の創刊を支援するとの約束をとりつけた。<sup>(29)</sup>

1933年11月15日、ハルビン特務機関長であった小松原道太郎大佐と満洲国のウクライナ人居留民を代表して、Д・バルチェンコ、П・ヤフノ、I・スヴィット、П・マルチーシンが署名してノヴォトルゴバヤ通9番地に所在していたウクライナ民族の家が正式にウクライナ人の管理となることが確認された。<sup>(30)</sup>一方、ウクライナ民族の家の運営を巡って、ハルビン特務機関とトラブルが発生することもあった。1934年2月下旬、ウクライナ民族の家は、ハルビン高等女学校（のちの哈爾濱富士高等女学校）に1階の5部屋を教室として貸し出した。<sup>(31)</sup>この合意はハルビン日本商工会議所のヤマダの支援により可能となり、2年間

(29) *Світ I. Українсько-японські взаємини 1903-1945...* - С. 109-111.

(30) *Так само...* - С. 124.

(31) ハルビン女学校の教員の回顧によれば、女子生徒は1階の他、式典のみ3階のホールを使用した。また、建物裏には運動場としても使用できる広場があった。「哈爾濱高女沿革」、今、ハルビンを語る会編『ハルビン日本人女学校』今、ハルビンを語る会、1997年、24～26頁。

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

の契約と賃料が前払いされることとなった。この契約を巡っては、堀江を通じて、ウクライナ民族の家には決定権がない旨がハルビン特務機関から伝達された。結果としてウクライナ民族の家からハルビン特務機関に謝罪の書簡を送る<sup>(32)</sup>ということで問題が解決した。なお、表1で人物が特定できなかった日本軍関係者の多くは、『満洲通信』の検閲担当であったと思われる。

表1 イヴァン・スヴィットが関係した日本人一覧

名前	時期	スヴィットの著作での説明	付記
杉原千畝	1924-31年	1924年、スヴィットが記者の時から親交あり。ウクライナ・クラブのウクライナ人居留民会への返還に尽力	在ハルビン日本総領事館、日露協会学校、満洲国外交部勤務を経てロシアニアの在カウナス領事館・領事代理。1940年、ユダヤ人を中心とした避難民に通過査証を発給
K・K・ホリエ (堀江一正)	1926-37年	陸軍大尉、ハルビン特務機関ウクライナ問題代表・顧問、1934年満洲国外交部ハルビン支部の情報部長。ロシア語が堪能	陸軍中央幼年学校第9期、陸軍士官学校(士候)第24期、近衛歩兵第1連隊付少尉、シベリア出兵、イルクーツクへのロシア語留学、ウラジオストク駐屯を経て中尉で予備役編入、南満洲鉄道哈爾濱事務所調査課・情報主任、正教徒(洗礼名:コンスタンティン・コンスタンティノヴィッチ)。スヴィットの著作では、2通りの記載方法があり、K・K・ホリエは洗礼名、K・ホリエは本名を意識して書かれたと思われる。
下村信貞	1931-36年	北川鹿蔵の同僚。満洲国外務省関係者	南満洲鉄道哈爾濱事務所職員、のちに満洲国外交部次長。ノモンハン事件では満洲国全権委員として事態鎮静化に努める。1955年ハバロフスクのラゲリで病没
北川鹿蔵	1931-35年	南満洲鉄道哈爾濱事務所経済局職員、日本ツラン協会会長	南満洲鉄道哈爾濱事務所調査課職員。庶務課所属時の庶務課長は軍司義男、同僚に大澤隼。後に哈爾濱市史編纂室主査。ただし1931年～35年の哈爾濱事務所の名簿には記載がない。
軍司義男	1926-1931年	南満洲鉄道哈爾濱事務所	南満洲鉄道哈爾濱事務所庶務課長、参事、所長囑託。満鉄勤務の前は、金沢でロシア語講師。正教徒で洗礼名はニコライ
高畑誠一	1931年	南満洲鉄道哈爾濱事務所運輸課。ウクライナ人技師から「タカハタ」はウクライナ語で「こんな小屋」の意味だと言われ喜ぶ。	南満洲鉄道哈爾濱事務所運輸課長、参事
福井敬蔵	1926-31年	南満洲鉄道哈爾濱事務所	南満洲鉄道哈爾濱事務所参事、所長囑託
古澤幸吉	1926-29年?	南満洲鉄道哈爾濱事務所長	南満洲鉄道哈爾濱事務所所長、元外交官、後にハルビン工業大学顧問。大澤隼の後を受けて哈爾濱日日新聞社長。『ハルビンスコエ・ウレーミヤ』社長も兼務(「大澤隼」も参照)
ヤギ	1932年	満洲国警察顧問。『満洲通信』の検閲担当。同紙の創刊について橋本欣五郎と相談	関東軍のイタリア人スパイであったアムレト・ヴェスバの手記に登場する満洲国中央警察顧問のギリシャ正教徒ニコライ・ニコラエヴィチ・八木と思われる。

(32) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 131.*

神戸学院経済学論集（第52巻第3・4号）

タナカ	1932-35年	ハルビン特務機関大尉。橋本欣五郎中佐と同席	
カタヤマ	1932年	日本当局の検閲官	
タナカ	1932年	満洲の外国人ジャーナリストの通訳	
橋本欣五郎	1932年	陸軍中佐。1932年5月に、第十師団司令部を訪問した際にロシア人と間違われ叱責される。ウクライナ人と分かったあとに、ウクライナ独立運動などについて話し合う。『満洲通信』の発刊を支援	姓のみの記載だが、スヴィットは、のちの二・二六事件の将校たちに影響を与えたと記述。同時期に第十師団野砲兵第十連隊付として渡満、ハルビンに駐屯。師団参謀部「特班」班長。元ハルビン特務機関長
大澤準	1933-34年	ロシア語新聞『ハルビンスコエ・ウレミア』編集者。同紙にウクライナ関連の連載を設ける	南満洲鉄道哈爾濱事務庶務課勤務を経て、哈爾濱日日新聞社長。宗像金吾の後援をうけ『ハルビンスコエ・ウレミア（哈爾濱時報）』を創刊。二・二六事件の際、同紙を古澤幸吉に引き継ぎ、夕刊紙『ハルビンスコエ・ウレミア・ヴェーチェラム』社長となった。その後、パリ、ロンドン、ベルリンを巡り、北京で華北交通株式会社に終戦まで勤務した。
小松原道太郎	1933年	ハルビン特務機関長、陸軍大佐	離任時少将。中将に昇任後ノモンハン事件で第23師団を指揮、壊滅的損害を受ける。
K・クロキ	1933年、39-40年	憲兵大尉、別名：クラハシ・トシオ。ウクライナ人に対して好意的、ロシア・ファシスト党に否定的。1940年に上海に着任し、ロシア人やウクライナ人を管理下に置こうとした。	Балакшин (1958) にもクロキ＝クラハシ・トシオとしてたびたび登場。同時期の将校名簿から考えられるのは倉橋武雄？（駐ソ武官、後にビルマ方面軍参謀。戦後、東京都金融業組合事務局長。倉橋敏夫（戦後、ソビエトプレス通信社・社長）の可能性もある。
K・ナカムラ	1934年	憲兵大尉、ロシア・ファシスト党顧問、大学を含む在満ロシア人組織の顧問。堀江に毛嫌いされていた。	カスベ事件に関与したコンスタンティン・イヴァノヴィチ・中村と思われる（本名：阿部幸一）。ハルビン憲兵隊通訳で大尉ではないが、ハルビンのロシア人社会ではそう思われていた。
ヤマダ	1934年	ハルビン日本商工会関係者。「ウクライナ民族の家」とハルビン女学校の賃貸契約仲介	『哈爾濱商工名録』などを確認するとハルビン日本商工会関係者として山田小一と山田忠三がいるが特定できなかった。
ヤマオカ	1934年秋	大尉。テュルク民族主義者のアヤズ・イスハキがハルビンを訪問した際、歓迎会で堀江一正とともにハルビン特務機関を代表して挨拶。	山岡道武と思われる。当時の階級は少佐。本人によれば、この当時は、関東軍参謀部第2課参謀。一方、陸軍の将校名簿の所属は空欄（前年は参謀本部々員と記載）。参謀本部ロシア課長、駐ソ大使館付武官を経て、第1軍参謀長で終戦。ただし『満洲通信』35号（91号、1934年12月8日）3面のイスハキ歓迎会の記事には名前がない。1937年にハルビンへ来たウクライナ民族主義者組織グループのフリホリー・クベツィキーの手記に登場する「ヤマオカ少佐」も同一人物か。
S・ナカムラ	1935年1月15日	記者	
ハガサキ	1935年1月15日	満洲国外務省	同日に堀江、下村と面会
柳田元三	1935年2月	大佐、関東軍参謀。テュルク・タタール訪問団と会談	のちにハルビン特務機関長。1944年インバル作戦で第33師団長解任。戦後、ソ連へ抑留、1952年モスクワで死去
シバタ	1935年9月-12月	プロトボポフ大佐の『満洲通信』に対する厳しい検閲に同席。「緑ウクライナ」の地図発行に際して、ソ連総領事館より抗議を受けたため、堀江とも協議	ニコライ・プロトボポフは白軍の元大佐で、満洲国の警察に勤務していた。『ハルビンスコエ・ウレミア』の編集主幹であった柴田五郎（東京外国語学校出身）、または柴田太郎（ハルビン学院出身）の可能性もある。
ヒロセ	1935年10月	記者	
フジワラ	1935年12月	検閲主任補佐	



## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

イノウエ	1936年末-1940年	ハルビン特務機関顧問, K・ホリエがウクライナ担当に任命。1940年頃, 満洲国高等裁判所勤務	ウクライナ民族主義者組織グループのクベツィキーの手記にも頻繁に登場する。同時期の満洲職員録の哈爾濱高等法院, 高等検察庁の名簿に井上姓はなかった。
タムラ	1936年末	駐独(ベルリン) 満洲国使節	駐ドイツ満洲国公使館と思われる。『満洲通信』の特派員が面談
ヤマグチ・シゲオ	1939-40年	上海特務機関所属の大佐, 別名「森」	
竹下義晴	1940年	上海特務機関長。上海ウクライナ人居留民委員会を承認	関東軍調査部長, ハルビン駐在, 山海関特務機関長を経て, 上海へ。その後, 第27師団, 第30師団長などを歴任
カガワ	1940年頃	ハルビン特務機関通訳	
カニエ	1940年頃	少佐, 上海で面会	蟹江元? (ハルビン特務機関満洲里・三河出張所の責任者, 後に第五方面軍情報部権太支部長。1947年にソ連で銃殺), 1936年の陸軍現役将校名簿には蟹江姓は1名のみ。
サトウ	1941年	上海の日本軍関係者	
ナカガワ	1943年	大尉。上海の日系放送局関係者	『李香蘭—私の半生』にも登場する中川牧三と思われる(テノール歌手, 中支派遣軍総司令部参謀部付上海陸軍報道部所属文化担当将校)
N・カワシマ	1943年10月	記者, 上海で面会	
保田三郎	1944年	1944年『ウクライナ・日本語辞典』編纂者の1人	同辞典の著者は, ワシリー・オジネツとアナトリー・チブローワ。チブローワは偽名で, クベツィキーによれば, 本名はアナトリー・クビチュンコ
増田晴三	1944年	1944年『ウクライナ・日本語辞典』編纂者の1人	

【出典】 *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945* を基に『南満洲鉄道職員録』, 『満洲国官吏録』, 『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』, 『陸軍予備役将校同相当官服役停年名簿』の各年, 『満洲国及び支那に於ける新聞』, 『哈爾濱商工名録』などの史料, 参考文献を参照して作成。

### 3 『満洲通信』 1932—1937年

在米ウクライナ自由科学アカデミーのイヴァン・スヴィット・フォンドには『満洲通信』200号中6号のみが現存していないだけでほぼ完全な形で残っている。新聞紙面を分析する際, 特定の記事のみ取り上げると, バイアスがかかる可能性が高い。そこで, 各号の最も重要な記事が掲載された1面から3つの記事を選び, その見出しと執筆された言語, その内容を表2にまとめ, その他の1面記事についても可能な限り情報を加えた。それを基に各年の動向を分析し, 加えてハルビンのウクライナ人の日常が窺える写真入りの記事をいくつか取り上げたい。

表 4-2 『満洲通信』の各号の1面記事一覧

号数	発行日	一面見出し	言語	備考
1号	1932年8月5日 (月曜日)	日本が満洲国を承認する～武藤大将が初代大使となる／武藤大将のハルビン訪問／岡村將軍、ハルビンを訪問	ロシア語	他3記事。紙名、年号日付などはウクライナ語
2号	1932年8月12日 (月曜日)	国境が明確になる／満洲人は共産主義を支持しない／民族主義へのプロセス	ウクライナ語	他2記事
3号	1932年8月19日 (月曜日)	満洲の税金／満洲の登録についての認識／祝賀会	ロシア語	他1記事。紙名、年号日付などはウクライナ語
4号	1932年9月27日 (月曜日)	フランスの空の軍事作戦／ザカルパッチャの自治／イヴァン・フランコの記念碑	ロシア語	他5記事。
5号	1932年10月7日 (金曜日)	ヨーロッパとウクライナのバランス－ウクライナなくしてヨーロッパは生きられない／科学アカデミーでのスキャンダル／新しいウクライナの組織	ロシア語	他2記事。スキャンダルはキエウ（キエフ）科学アカデミー
6号	1932年10月15日 (土曜日)	ウクライナの飢饉／マゼッパ300周年記念／プロスヴィータ協会について	ロシア語	他3記事。ウクライナ飢饉については『ディロ』の記事をもとに執筆。マゼッパの式典はソカルにおいて
7号	1932年10月22日 (土曜日)	国際会議でのウクライナ人／グツリが組織される／社会主義ウクライナでの飢饉	ウクライナ語	他7記事
8号	1932年12月12日 (土曜日)	自分たちの権利／ウクライナの飢饉／ブリュッセルでのウクライナの独立	ウクライナ語	他4記事
9号	1932年12月19日 (土曜日)	シカゴでの博覧会／ブカレストでのウクライナ大使の活動／ウクライナ民族主義者組織に属するため	ウクライナ語	他6記事。「シカゴでの博覧会」は翌年のシカゴ万博にむけてリヴィウでウクライナ側の組織委員会発足
1号	1933年1月（日付無、土曜日）	行方不明／バプロ・スリャティツキー追悼／イタリアでのウクライナのコンサート	ウクライナ語	他7記事。「行方不明」は極東ウクライナ人のアイデンティティを問う内容でその数は5万人と主張。スリャティツキー（Павло Сулятицький）は革命ウクライナ党员
2号	1933年2月11日 (土曜日)	ウクライナはすでに長らく浄化された／ハルキウの変化／ウクライナはモスクワにパンを与えない	ウクライナ語	他10記事。最初の記事は、ウクライナ人が共産党によって浄化されたという内容
3号	1933年2月18日 (土曜日)	ウクライナ語学校が必要だ／社会主義ウクライナでのバルチザン活動／ハルビンのウクライナ・バー	ウクライナ語	他17記事
4号	1933年2月25日 (土曜日)	ハバロフスクは防衛の準備をしている	ウクライナ語	他14記事
5号（14号）	1933年3月4日 (土曜日)	最初の年	ウクライナ語	他6記事
6号（15号）	1933年3月11日 (土曜日)	ウクライナ民族の家開館／ブラハのウクライナ・クラブ／フランスのウクライナ人	ウクライナ語	他8記事。書籍広告あり
7号（16号）	1933年3月18日 (土曜日)	タラス・シェフチェンコの日／プロスヴィータの夕べ	ウクライナ語	他7記事
8号（17号）	1933年3月25日 (土曜日)	ラトビア・ウクライナ連携／政府代表が逮捕される／上海のウクライナ人	ウクライナ語	他8記事
9号（18号）	1933年4月1日 (土曜日)	仕事が必要です！／ウクライナ人民共和国兵士の集会／モスクワでウクライナ共産主義者訪問団逮捕	ウクライナ語	他5記事

## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

10号 (19号)	1933年4月8日 (土曜日)	極東と我々／共産主義者が戦争を始めた／ニューヨークのウクライナ人高等学校	ウクライナ語	他6記事
11号 (20号)	1933年4月16日 (土曜日)	フリストス復活!	ウクライナ語	復活祭特集
12号 (21号)	1933年4月22日 (土曜日)	ウクライナとクバーニに穀物はない／ウィニペグのホールでウクライナオペラ上演	ウクライナ語	他12記事。ウィニペグはカナダ
13号 (22号)	1933年4月29日 (土曜日)	ウクライナの生き方ーロイド・ジョージとウクライナ関係／モスクワはウクライナを殲滅している	ウクライナ語	他6記事。表題の記事ではガレス・ジョーンズのウクライナ訪問とレポートについて言及あり
14号 (23号)	1933年5月6日 (土曜日)	編集について／ソ連を崩壊させる必要がある ウクライナ科学研究所	ウクライナ語	他3記事。研究所はワルシャワ所在
15号 (24号)	1933年5月13日 (土曜日)	万国博覧会とウクライナの宣伝／ペトリュラ追悼の日	ウクライナ語	他3記事
16号 (25号)	1933年5月20日 (土曜日)	万博のウクライナ館／我々の市民権に向けて／神学校の記念日	ウクライナ語	他1記事。神学校はリヴィウに所在
17号 (26号)	1933年5月25日 (木曜日)	ウクライナでの反革命／ウクライナ産業銀行／ウクライナ合唱団春のコンサート	ウクライナ語	他1記事
18号 (27号)	1933年6月3日 (土曜日)	ペトリュラ記念アカデミー ウクライナ・コンサート／ウクライナ青年は準備している	ウクライナ語	他1記事。アカデミーはハルビンで設立。青年はハルビン在住のウクライナ系若者。2面にハルビンのウクライナ協会の写真あり
19号 (28号)	1933年6月10日 (土曜日)	『満洲通信』読者へ!／中央組合の展覧会／「緑の楔」からの逃亡者	ウクライナ語	他4記事。展覧会はリヴィウ。満洲国への逃亡者の意味
20号 (29号)	1933年6月17日 (土曜日)	ソヴェトのウクライナ／シカゴでの展示開幕／イリヤ・ココルズの死	ウクライナ語	他4記事。イリヤ・ココルズ(Ілля Кокорулз, 1857年8月1日-1933年6月2日)はリヴィウの教育者、プロスヴィータ協会会長
21号 (30号)	1933年6月24日 (土曜日)	シカゴでの万博開幕／モスクワでの反ウクライナキャンペーン／共産主義の主	ウクライナ語	他5記事。1記事はロシア語「ソ連が軍備を強化」
22号 (31号)	1933年7月1日 (土曜日)	万博での展示グランドオープン／ウクライナでの新たな逮捕／新しい雑誌	ウクライナ語	他5記事。『満洲通信』のタイトルの下に「ウクライナ国家・国民世論の機関」のサブタイトルが入る。以下最終号まで
23号 (32号)	1933年7月8日 (土曜日)	緑の楔からのニュース／ペトリュラ追悼式／ウクライナの報道がねじ曲げられる	ウクライナ語	追悼式はトルコ
24号 (33号)	1933年7月15日 (土曜日)	緑の楔からのニュース／パリの図書館／ナチスとポーランドの交渉	ウクライナ語	
25号 (34号)	1933年7月22日 (土曜日)	シカゴ万博でのウクライナ／ハルビンのウクライナ劇場／新たに処刑される	ウクライナ語	処刑はハルキウにおいて
26号 (35号)	1933年7月29日 (土曜日)	武藤元帥死去／ウクライナ軍事史のアルバム／ポスティシェフの2回目の演説	ウクライナ語	他1記事。武藤は関東軍司令官、満洲国駐在特命全權大使 バーヴェル・ポスティシェフ(ウクライナ共産党)
27号 (36号)	1933年8月5日 (土曜日)	フランス語のウクライナの歴史／英雄は尊敬されている／シカゴのウクライナ人	ウクライナ語	
28号 (37号)	1933年8月12日 (土曜日)	現存せず		発行日は推定
29号 (38号)	1933年8月19日 (土曜日)	現存せず		発行日は推定

神戸学院経済学論集（第52巻第3・4号）

30号（39号）	1933年8月26日 （土曜日）	ドニエストルの悲劇／満洲国の最新ニュース／ザカルパッチャのウクライナ学校	ウクライナ語	他5記事
31号（40号）	1933年9月2日 （土曜日）	ボルショビキの楽園からの転換／白山での休日／ウクライナ系カナダ人の記事	ウクライナ語	他3記事。1記事はロシア語「極東のウクライナ・プレス」
32号（41号）	1933年9月9日 （土曜日）	現存せず		発行日は推定
33号（42号）	1933年9月16日 （土曜日）	『満洲通信』読者へ！／アムールのショービニズム／ウクライナ青年会議	ウクライナ語	他4記事
34号（43号）	1933年9月23日 （土曜日）	『満洲通信』読者へ！（出版協会）／ウクライナ建築への関心／ハルビンのウクライナ教区の生活より	ウクライナ語	他1記事。1934年ウクライナ卓上カレンダーの広告あり
35号（44号）	1933年9月30日 （土曜日）	『満洲通信』読者へ！／国際ウクライナ救済委員会／ショービニズムがさらに高まる	ウクライナ語	他5記事
36号（45号）	1933年10月7日 （土曜日）	ウクライナ人の抗議—在満ウクライナ人の抗議デモ／緑の楔からの移住者組合／極東の赤軍	ウクライナ語	他5記事。抗議デモは共産主義に対するもので10月14、22日に計画
37号（46号）	1933年10月14日 （土曜日）	緑の楔からのニュース／ベルリンのウクライナ科学研究所／国際女性運動におけるウクライナ女性	ウクライナ語	他1記事
38号（47号）	1933年10月21日 （土曜日）	独立ウクライナ、永遠なれ！／ハルビンのウクライナ人居留民会悲しみの日／ゲーペーウが活動する	ウクライナ語	他1記事。『ノーヴォ・ゾーリヤ』紙、『ディロ』紙から記事転載の記載あり
39号（48号）	1933年10月28日 （土曜日）	ウクライナ飢饉に関して／国際連盟におけるウクライナ人民政府の行動／ウクライナ解放闘争博物館	ウクライナ語	他2記事。博物館はプラハ所在
40号（49号）	1933年11月4日 （土曜日）	大ウクライナの農民蜂起／非難の決議／ウクライナの記事	ウクライナ語	他1記事。「非難の決議」はハルビンのウクライナ人が「ウクライナ占領中のソ連に対する」もの
41号（50号）	1933年11月11日 （土曜日）	キーウでの軍事会議／天津からの手紙／土曜の集会	ウクライナ語	他2記事。天津ウクライナ人居留民会からの手紙。土曜日の集会は毎週土曜日のウクライナ人の集い
42号（51号）	1933年11月18日 （土曜日）	ウクライナ市民権について／満洲国のウクライナの人々へ／ウクライナ出版組合	ウクライナ語	他2記事
43号（52号）	1933年11月25日 （土曜日）	ウクライナ・ボクロフシカ（生神女庇護）教会にて／プロスヴィータ協会から／フロマータ会員へ！	ウクライナ語	他5記事
44号（53号）	1933年12月5日 （火曜日）	絶望の行動／カフカスのミハイロ・フルシェフスキー／シェフチェンコの記念碑	ウクライナ語	他2記事「絶望の行動」は詩人のロスチスラフ・ヴァシレンコの記事、火曜日発行
45号（54号）	1933年12月16日 （火曜日）	モスクワは極東での戦争の準備ができた	ウクライナ語	火曜日の記載があるが土曜日の間違い。1934年ウクライナ卓上カレンダーの広告あり
46号（55号）	1933年12月23日 （土曜日）	モスクワはウクライナから奪う／ウクライナ人教員組織／プロスヴィータ協会の生活	ウクライナ語	他1記事
47号（56号）	1933年12月30日 （土曜日）	ウクライナ人と友人の皆さん、新年おめでとうございます／明確にする（露語）／極東の大陰謀	宇・露語	ロシア語記事は「明確にする」内容はハルビンのロシア人組織やロシア人を非難していない。
1号（57号）	1934年1月6日 （土曜日）	ハルビンのウクライナ人組織の日本軍事使節への訴え（露語）／ウクライナ解放闘争博物館	宇・露語	「訴え」の記事は露語。日本軍事使節はハルビン特務機関
2号（58号）	1934年1月20日 （土曜日）	兄弟関係はどこに？／厳粛なアカデミー／ウクライナ化の終焉（露語）	宇・露語	アカデミーは、ハルビン・ウクライナ人居留民会による研究報告会

## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

3号(59号)	1934年1月27日 (土曜日)	ウクライナ人へ/ウクライナ移民 組合全会員へ/コサックへ	宇・露語	他5記事。プロスヴィータ協会 大会の案内(1月30日)あり
4号(60号)	1934年2月16日 (土曜日)	ハルビンでの大デモンストレー ション/ウクライナの状況につ いてのイギリスメディアの声/即位 式の準備	ウクライナ語	他10記事
5号(61号)	1934年2月24日 (土曜日)	モスクワに対するウクライナ/上 海のウクライナ・クラブ、グラン ドオープン/ウクライナ展覧会	ウクライナ語	他5記事
6号(62号)	1934年3月3日 (土曜日)	溥儀皇帝陛下万歳!満洲帝国に幸 あれ!/レヴィツキー大使の発言 /ハルビンの休日	ウクライナ語	Левницький Дмитро(1877-1942), 在ポーランド・ウクライナ大使 (ウクライナ国民民主連盟所属)
7号(63号)	1934年3月10日 (土曜日)	詩人の大きな悲しみ/タラス・ シェフチェンコとウクライナの国 家政治思想の発展に対するその重 要性(露語)	宇・露語	
8号(64号)	1934年3月19日 (月曜日)	ソヴェトの状況/ウクライナから の文書/緑の楔	ウクライナ語	
9号(65号)	1934年3月26日 (月曜日)	ブラハでの会議-移民者ラダ代 表者会議/ドイツと東ヨーロッパ /ウクライナにおける分離主義	ウクライナ語	他4記事。「分離主義」記事は スタニスラフ・コシオールウ ウクライナ統治に対するウクライ ナのソヴェトからの分離主義を 指す
10号(66号)	1934年3月31日 (土曜日)	ハルビンでのウクライナ・ラジオ の夜/ウクライナ・ラジオコン サート/我々はアジアにあり	ウクライナ語	他2記事
11号(67号)	1934年4月7日 (日曜日)	フリストス復活!ウクライナ復 活!/死が死を克服した。復活に むけてのゴルゴダへの道	ウクライナ語	
12号(68号)	1934年4月14日 (日曜日)	ヨーロッパはウクライナ人に開か れている/ウクライナ語が禁止さ れる/ウクライナ解放闘争博物館	ウクライナ語	ウクライナ語が禁じられたのは ブコヴィナ
13号(69号)	1934年4月23日 (月曜日)	地元の行事を開催する場所/満洲 国のウクライナ人居留民会/ドイ ツの国境政策についてのイギリス の報道	ウクライナ語	
14号(70号)	1934年4月28日 (土曜日)	ロンドンのウクライナ救済委員会 /ポーランドにおけるウクライナ 問題についてのイギリス人歴史家 /緑の楔のウクライナ人	ウクライナ語	他3記事。「緑の楔のウクライ ナ人」はドミトロ・ポロヴィク (1876-1920)に関する記事。 「緑ウクライナ」の表現あり。
15号(71号)	1934年5月12日 (土曜日)	我々の記念日の一つ/ベトロ・マ ルチーシン氏との会話 アメリカ と日本の和解/ソ連と人民連合	ウクライナ語	通算番号「1号」と誤記。他9 記事。Марчишин Петро(1889 ~生没年不明),ハルビン・ウ クライナ教員組合会長,居留民 会副会長歴任
16号(72号)	1934年5月19日 (土曜日)	ハルキウとキーウ/新しいウクラ イナ・コペラーティヴ/ウクラ イナの地震	ウクライナ語	他2記事。地震は3月29日に キーウとヴィニツァ
17号(73号)	1934年5月26日 (土曜日)	シモン・ベトリューラ記念アカデ ミー:ウクライナ・ラジオの夕べ /満洲帝国の承認/私たちの教会 で何が起きているのか?	ウクライナ語	他2記事
18号(74号)	1934年6月2日 (土曜日)	モスクワの下で我々の同胞がいかに 生きているか~飢饉,テロル, 反乱,ウクライナの苦難/東郷元 帥死去/飢饉の楽園から	ウクライナ語	他7記事
19号(75号)	1934年6月9日 (土曜日)	ウクライナ人居留民会~ウクライ ナ人へ!/我々のラジオの夕べ~ アジアにおける最初のベトリュー ラ記念学会/我々の仕事	ウクライナ語	他6記事

20号 (76号)	1934年6月16日 (土曜日)	有害な要素の排除～『満洲通信』へのウクライナ・フロマダ会長の声明／フロマダ総会をどう思う？／より決断する必要がある	ウクライナ語	他6記事
21号 (77号)	1934年6月23日 (土曜日)	占領者下の緑ウクライナ／緑ウクライナの生活クロニクル／自由のための戦いにおける「プロメテイ」	ウクライナ語	他4記事
22号 (78号)	1934年6月30日 (土曜日)	新しい成果について～プロスヴィータはその役割を発展しなければならぬ／ウクライナ報道展／占領者がやってきた	ウクライナ語	他2記事
23号 (79号)	1934年7月7日 (土曜日)	我らの若者を活性化しよう～緑ウクライナへの我々の方法／リヴィウのソキルの大会（露語）／上海のソキル・クラブ設立	宇・露語	ソキル（ファルコン）は1862年にプラハで始まったスポーツ運動。1867年にはリヴィウでもクラブ設立
24号 (80号)	1934年7月14日 (土曜日)	スタニスラウのウクライナ会議～全世界からの代表団／3、4日目は女性会議／ウクライナ民族の家の生活	ウクライナ語	他7記事。スタニスラウは現イヴァノ・フランキウシク
25号 (81号)	1934年7月28日 (土曜日)	ウクライナにおけるモスクワに対する頑強な戦い／ウクライナ民族の家／聖グヴォロディーミル記念の夕べ	ウクライナ語	他4記事。聖グヴォロディーミル記念の夕べはイヴァン・スヴィットも実行委員会メンバー
26号 (82号)	1934年8月6日 (月曜日)	赤軍は腐敗している／緑ウクライナの生活／ウクライナの首都移転についてのイギリスの報道	ウクライナ語	他9記事。首都はハルキウからキーウに移転
27号 (83号)	1934年8月11日 (土曜日)	共産主義は国民を毒殺する／ハルビンのウクライナ学校／ウクライナ劇団組合	ウクライナ語	他7記事。劇団組合はハルビン
28号 (84号)	1934年8月27日 (土曜日)	小松原将軍ハルビンを去る～送別会と挨拶／ウクライナ民族の家の休日／ハルビンのウクライナ劇場	ウクライナ語	他3記事。送別会は8月20日にウクライナ・クラブにおいて
29号 (85号)	1934年9月10日 (月曜日)	『満洲通信』は満2年に／ウクライナ飢饉の真実／ウクライナ解放闘争博物館のニュース	ウクライナ語	
30号 (86号)	1934年9月17日 (月曜日)	モスクワはウクライナを破壊する／ウクライナの恐ろしい状況／ソヴェトは「平和」を建設する	ウクライナ語	他4記事
31号 (87号)	1934年9月29日 (土曜日)	来たる満洲帝国の新時代／極東についての記事／別のラジオ番組	ウクライナ語	「極東についての記事」はリヴィウの『ノヴァ・ゾリヤ』紙67・68号に「緑ウクライナ」と「満洲のウクライナ人」が掲載されたことについて。
32号 (88号)	1934年10月13日 (土曜日)	大ウクライナ、緑ウクライナは同じだ／命令された飢饉／ウクライナ劇場にて	ウクライナ語	他5記事
33号 (89号)	1934年10月22日 (月曜日)	ハルビンの生神女庇護祭／『ナタールカ・ポルターウカ』大成功／悲劇の終わりの日	ウクライナ語	他2記事。『ナタールカ・ポルターウカ』イヴァン・コトリャレウシキー原作の戯曲を10月8日にウクライナ民族の家で上演
34号 (90号)	1934年11月13日 (火曜日)	記者会見～極東でのウクライナ出版物／『ナタールカ・ポルターウカ』の映画／ウクライナ・ラジオコンサート	ウクライナ語	他3記事。映画は1935年からリヴィウで撮影開始。ラジオコンサートはプラハにて
35号 (91号)	1934年12月8日 (土曜日)	新しい仕事～ウクライナ民族の家の重要なお知らせ／ウクライナ人へー鉄道技師の登録／死亡記事：ミハイロ・フルシエフスキー	ウクライナ語	他1記事

## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

36号 (92号)	1934年12月18日 (火曜日)	12月23日ウクライナ移民連盟の夕べ/オペレッタ『ナタルカ・ホルターウカ』上演/緑ウクライナにて	ウクライナ語	他5記事。『ナタルカ・ホルターウカ』はオペレッタ全3幕(ミコラ・リセンコ作曲)、ウクライナ民族の家で上演
1号 (93号)	1935年1月1日 (火曜日)	新年おめでとうございます!/ウクライナ人へ!ウクライナ民族の家は居留民の利益に尽くします/1935年ウクライナカレンダー	ウクライナ語	他に新年祝の4広告(ウクライナ青年組織「緑の楔」、プロスヴィータ協会、ウクライナ移民連盟、ウクライナ民族の家)
2号 (94号)	1935年1月7日 (月曜日)	降誕祭を祝う/新年にウクライナ人はどのように出会ったか/ウクライナ移民連盟の次回の夕べ	ウクライナ語	ウクライナ人居留民会の広告
3号 (95号)	1935年1月14日 (月曜日)	ソヴェトの危機〜スターリンは若者を制御することはできない/「自発的な集団化」/モスクワはもういい状態にはできない	ウクライナ語	広告:ウクライナ民族の家「仮面舞踏会」会費:マスク着用50分、なし80分
4号 (96号)	1935年1月21日 (月曜日)	独立記念日を祝った/ラジオプログラム/「緑の楔」連盟の夕べ	ウクライナ語	
5号 (97号)	1935年2月28日 (土曜日)	新しい段階へ/ウクライナ移民連盟の最新の決定/アラブのナショナリズム	ウクライナ語	他1記事
6号 (98号)	1935年3月9日 (土曜日)	今日、私たちの先人の思い出を祝います〜ウクライナ民族の家で皆でシェフチェンコの日/地域社会の緑ウクライナ 移民連盟の組織	ウクライナ語	
7号 (99号)	1935年3月16日 (土曜日)	満洲帝国の新時代/奉天での記念日/日本語クラス	ウクライナ語	日本語クラス(Курсы Ніппоської Мови)は、3月18日開講、無料、夜間クラスは週3回
8号 (100号)	1935年3月26日 (火曜日)	100号/我々の時代	ウクライナ語	
9号 (101号)	1935年4月6日 (火曜日)	我々の新しい段階/ウクライナ市民へ/パリで『ドナウ河畔のコサック』再演	ウクライナ語	曜日は土曜の間違い。『ドナウ河畔のコサック』(セメン・グラク・アルテモフスキー作曲)は80年ぶりにシャンゼリゼ劇場での再演
10号 (102号)	1935年4月16日 (火曜日)	モラルの回帰に向けて/モスクワはソフィア大聖堂を破壊している/ロンドンでの英字間コンタクト	ウクライナ語	他1記事
11号 (103号)	1935年4月28日 (日曜日)	フリストス復活/ウクライナ復活/聖堂の首長・主権・国家	ウクライナ語	復活祭協賛広告:プロスヴィータ協会、ウクライナスポーツ団体「シーチ」、ウクライナ青年連盟、青年協会「緑の楔」、ウクライナ移民連盟、教員組合
12号 (104号)	1935年4月9日 (水曜日)	「小ロシア」の苦悩/満洲帝国におけるウクライナの独立思想の勝利/イギリス人は言う「ウクライナの解放を待っている」	ウクライナ語	他4記事。4月と誤植
13号 (105号)	1935年4月19日 (日曜日)	居留民会会議の前に/ウクライナ人居留民会声明/ロンドンでのイギリス・ウクライナ委員会	ウクライナ語	他1記事。4月と誤植。居留民会会議は5月19日開催。英字委員会はフレッドマン・アッシュリンカーンを幹事として4月16日にサヴォイ・ホテルで結成
14号 (106号)	1935年5月25日 (土曜日)	国民的英雄でウクライナ大聖堂の首長の不滅と栄光と永遠の記憶—ウクライナ人民共和国大オタマン・シモン・ペトリュラ	ウクライナ語	他2記事。通算番号105号と誤植
15号 (107号)	1935年6月2日 (土曜日)	S!O!S! /ウクライナの若者には何もない/ユゼフ・ピウスツキ元師死去	ウクライナ語	「SOS」は満洲でのウクライナ人の生活や意識について

16号 (108号)	1935年6月18日 (土曜日)	居留民会の会議の後で／満洲帝国 ウクライナ人居留民会からの告知 第一号／定期購読者、購読者、支 援者、今から読もうという皆さん へ	ウクライナ語	
17-18号 (109-10号)	1935年6月29日 (土曜日)	同胞の報道機関発展のために 中 欧におけるモスクワの基地	ウクライナ語	合併号。114号まで合併号
19-20号 (111-2号)	1935年7月19日 (金曜日)	「スターリンの福祉」／パリでベ トリュール記念学会／公爵邸破壊	ウクライナ語	他4記事。破壊されたのはキー ウ郊外のトルベツキー公爵邸の 庭園
21-22号 (113-4号)	1935年8月5日 (月曜日)	国民の責務／満鉄の変化／世界で のウクライナ人の生活	ウクライナ語	他4記事
23号 (115号)	1935年8月17日 (土曜日)	3年が経つ／ウクライナ会議の前 に／ルーマニアにおけるウクライ ナ人の統一公的委員会の権限	ウクライナ語	他5記事
24-25号 (116-17号)	1935年9月8日 (日曜日)	歴史的な出来事／江防艦隊の概要 ／ウクライナ人著名人の死	ウクライナ語	他3記事。「歴史的な出来事」は 9月1日のアジア号のハルビン までの運行。著名人はハルビン 在住の Пештич Григорий Петрович
26号 (118号)	1935年9月27日 (金曜日)	3周年／金婚／ヴォロディーミ ル・サリシキー將軍50歳	ウクライナ語	他3記事。金婚はハルビンのウ クライナ人で金婚を迎えた夫婦 がいるという内容
27号 (119号)	1935年10月10日 (木曜日)	ウクライナは巨大な監獄だ／教育 の権利／革命勢力との闘いの中で	ウクライナ語	他6記事
28号 (120号)	1935年10月22日 (火曜日)	ハルビンの生神女庇護祭／ウクライ ナに関する本／ウクライナにお ける反共産主義テロ	ウクライナ語	他9記事。本は英字委員会に よってロンドンで出版
29号 (121号)	1935年10月29日 (火曜日)	我々にオタマンは必要ではない／ 上海のウクライナ100人隊／ウク ライナ移民連盟は何を纏う？	ウクライナ語	他2記事
30号 (122号)	1935年11月7日 (木曜日)	我々の課題／ウクライナ教区の負 債／東方プロスヴィータ協会／ミ ハイロ・ミニコ博士来訪	ウクライナ語	負債はウクライナ・ボクロフシ カ教区のもの
31-32号 (123-4号)	1935年12月9日 (月曜日)	О.Я. ストックバクの思い出／ウク ライナについて少し話そう／チュ ルニーヒウの人々からのニュース	ウクライナ語	О.Я. Ступак 他5記事。11月と 誤植
33号 (125号)	1935年12月16日 (月曜日)	ヨーロッパに対するモスクワ ど のようにウクライナは生きている か？／奴隷貿易	ウクライナ語	「奴隷貿易」はソ連の集団化と 無償労働について
1号 (126号)	1936年1月1日 (水曜日)	新年おめでとうございます。	ウクライナ語	7新年広告：上から順にウクラ イナ・ボクロフシカ教区、ウク ライナ移民連盟、「レコード」印 刷所、ハルビン・プロスヴィー タ協会、プロメテイ・クラブ、 И.Я. Чури́н и -К-о (チューリン) 商会、映画上映告知
2号 (127号)	1936年1月7日 (火曜日)	降誕祭おめでとうございます。	ウクライナ語	10降誕祭広告：И.Я. Чури́н и -К-о (チューリン) 商会、プロ スヴィータ協会、ウクライナ移 民連盟、ウクライナ・ボクロフ シカ教区、「安いバザール」商 店、『満洲通信』、TGラジオ店、 「レコード」印刷所、ボル・ミ レル歯科用品店、コクシェビツ チ街の薬局「デシャン医師の調 合」
3号 (128号)	1936年1月19日 (日曜日)	次に何が？～プロスヴィータ協会 での議論	ウクライナ語	
4号 (129号)	1936年1月26日 (日曜日)	ウクライナ独立記念日／人々は何 を使っているか？／プロスヴィー タ協会の活動から	ウクライナ語	



## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

5号(130号)	1936年2月9日 (日曜日)	ウクライナにおける恐怖／ハルキウ大学130周年／モッタ顧問が次官に	ウクライナ語	スイスのジュゼッペ・モッタが大統領の次官になったという内容。
6号(131号)	1936年2月16日 (日曜日)	幸せなウクライナ～モスクワはウクライナの人々の魂をどうするか／ウクライナからの最新情報／英雄的なエピソード	ウクライナ語	他6記事
7号(132号)	1936年3月29日 (日曜日)	ウクライナの産業／ウクライナ・ブラストの活動から／ヘーチマン・オルリクの記事	ウクライナ語	他3記事。フィリップ・オルリク(1672-1742)の日記についての評論
8号(133号)	1936年4月6日 (日曜日)	アジアの生活／新しいプロスヴィータ協会の設立／『満洲通信』編集について	ウクライナ語	プロスヴィータ協会は青島で設立
9号(134号)	1936年4月12日 (日曜日)	フリストス復活!	ウクライナ語	復活祭7広告:『満洲通信』編集部, ウクライナ移民連盟, プロスヴィータ協会, ウクライナ・ボクロフスカ教区信徒総会, 映画広告『ボンベイ最後の日』(米), 『Casta Diva』(伊), 『浮かれ姫君』(米)
10号(135号)	1936年4月19日 (日曜日)	ロカノ条約にヨーロッパが懸念／ガリャ・バンセルの死／『ウクライナの極東』出版	ウクライナ語	ガリャ・バンセル(Hyacinthe de Gailhard-Bancel)はフランスの政治家, ウクライナ独立を支援。本は『満洲通信』から発刊, 価格20分
11号(136号)	1936年4月26日 (日曜日)	アメリカで大洪水／洪水後の復旧／インドでの闘争	ウクライナ語	
12号(137号)	1936年5月3日 (日曜日)	愛国心～ハルビン・プロスヴィータ協会での報告／ウクライナ人居留民会の総会	ウクライナ語	
13号(138号)	1936年5月10日 (日曜日)	ハルビンの生活／忘れてください／プロスヴィータ協会のコンサート	ウクライナ語	「忘れてください」はプロスヴィータ協会についての記事
14号(138号)	1936年5月17日 (日曜日)	ウクライナ人居留民会総会を前に	ウクライナ語	138号と誤植
15号(139号)	1936年5月17日 (日曜日)	ボゴモレーツ將軍の死／バルチェンコ博士の講義／プロスヴィータ協会の夕べ	ウクライナ語	5月17日と誤植(ボゴモレーツが5月19日死亡のため24日と推定)。ヴァディム・ボゴモレーツ(病理生体学者のオレクサンドル・ボゴモレーツの従兄)
16号(139号)	1936年5月31日 (日曜日)	もう一度, そしてまた	ウクライナ語	139号と誤植。「もう一度, そしてまた」はウクライナ人居留民会やウクライナ民族の家についての記事
17号(141号)	1936年6月7日 (日曜日)	重要な仕事を成し遂げよう／ウクライナ人居留民会総会／教区総会	ウクライナ語	
18号(142号)	1936年6月14日 (日曜日)	どう働かなければならないか～ウクライナ人居留民会総会を前に	ウクライナ語	
19号(143号)	1936年6月21日 (日曜日)	明日を待つ～ウクライナ人居留民会の新しいラダ	ウクライナ語	
20号(144号)	1936年6月28日 (日曜日)	新しい課題／博覧会でのウクライナ人	ウクライナ語	博覧会はニューヨーク, バリ, プラハ, ウィーン, ベルリンなどで開催
21号(145号)	1936年7月5日 (日曜日)	何が我々に必要か～我々の行動の普及に向けた課題	ウクライナ語	
22号(146号)	1936年7月12日 (日曜日)	仕事に取り掛かろう～ウクライナ人居留民会の新ラダとその要件／聖公ヴォロディーミルの日／『満洲通信』の発行について	ウクライナ語	

神戸学院経済学論集（第52巻第3・4号）

23号 (147号)	1936年7月19日 (日曜日)	全員の精神の力！／スラブゴロドの陰謀／ウクライナ市民に告ぐ	ウクライナ語	「スラブゴロドの陰謀」は『コムニスト』紙の記事を取り上げた『ディロ』紙の転載で、同市のウクライナ人に対する弾圧について。
24号 (148号)	1936年7月26日 (日曜日)	我々の理想は広い／学校事業 ウクライナ市民に告ぐ	ウクライナ語	学校はウクライナ人学校
25号 (149号)	1936年8月2日 (日曜日)	我々の仕事を合理的に分けるために／聖公ヴォロディーミルの日〜大成功の夕べ／共産主義者が針で殺される	ウクライナ語	
26号 (150号)	1936年8月9日 (日曜日)	プレスと読者／『ナタールカ・ポルターウカ』の映画	ウクライナ語	
27号 (151号)	1936年8月16日 (日曜日)	学校の権利／ウクライナの石油 (露語)	宇・露語	
28号 (152号)	1936年8月23日 (日曜日)	働くシーズンの前に／ウクライナ軍記念日／ウクライナ合唱団	ウクライナ語	他2記事
29号 (153号)	1936年8月30日 (日曜日)	クモが貪り食う	ウクライナ語	ソ連をクモに例えた評論
30号 (154号)	1936年9月6日 (日曜日)	『満洲通信』4周年／スポーツマンは楽しんでいます／王立研究所での報告	ウクライナ語	「スポーツ」はソ連のメディアを引用してハルキウでのディナモの試合などについて。「王立研究所」は、王立国際問題研究所（チャタム・ハウス）でのロマン・スマリ=ストツィキー（Смаль-Стоцький Роман）ウクライナ自由大学（ミュンヘン）教授のソ連に関する講演について
31号 (155号)	1936年9月13日 (日曜日)	ウクライナでの行事／ウクライナ青年連盟の夕べ／ウクライナ民族合唱団	ウクライナ語	他2記事。いずれもハルビンでのイベントの告知。「行事」はウクライナ国内のもの
32号 (156号)	1936年9月20日 (日曜日)	1931-1936年〜満洲帝国建国とその歴史	ウクライナ語	
33号 (157号)	1936年9月27日 (日曜日)	我々の愛国心／「ウクライナ化」	ウクライナ語	「ウクライナ化」は、キーウ大学の募集がロシア語で行われていることへの疑問
34号 (158号)	1936年10月4日 (日曜日)	ウクライナ歌謡の夕べ／過去について一言	ウクライナ語	9月27日のウクライナ民族の家のウクライナ民謡コンサート。「過去について一言」は極東ウクライナ人の歴史について
35号 (159号)	1936年10月11日 (日曜日)	『ナタールカ・ポルターウカ』の映画〜ウクライナの映画が完成する	ウクライナ語	
36号 (160号)	1936年10月18日 (日曜日)	ウクライナが燃えている／生神女庇護祭／次の火曜日／ウクライナ人居留民会の年鑑が出ました	ウクライナ語	他2記事。「次の火曜日」はウクライナ青年連盟の集いについて
37号 (161号)	1936年10月25日 (日曜日)	ブラハのウクライナ博物館 東洋学協会において	ウクライナ語	
38号 (162号)	1936年11月1日 (日曜日)	次はどこへ行く？ 1) どこへ行く？ 2) 我々は皆ウクライナ愛国戦線に行く 3) 我々の力の未来	ウクライナ語	
39号 (163号)	1936年11月8日 (日曜日)	フォックストロットのような伝染／忘れられた事実	ウクライナ語	「フォックストロット〜」はダンスのようにウクライナ人としての精神生活が広がるという内容。「忘れられた事実」は極東でのソ連との関係の経緯について
40号 (164号)	1936年11月15日 (日曜日)	ユダとユダ	ウクライナ語	1面すべて評論。ウクライナのユダとなつてはいけないといった内容

## 『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

41号 (165号)	1936年11月22日 (日曜日)	バザール～1921年11月21日—1936年／バザールの日／11月の休日	ウクライナ語	1921年11月21日のジトミール村のバザール村でのウクライナ人民共和国軍の兵士の悲劇について。「バザールの日」は11月22日にウクライナ民族の家での追悼集会について
42号 (166号)	1936年11月29日 (日曜日)	年配者と若者	ウクライナ語	1面すべて評論。ウクライナ運動の世代間の意識の差や世代を超えた組織の必要性について
43号 (167号)	1936年12月6日 (日曜日)	満洲帝国、イタリアに承認される／プロスヴィータの母に栄光あれ！	ウクライナ語	
44号 (168号)	1936年12月13日 (日曜日)	ウクライナの立場～日独同盟とウクライナ／火曜日の夕べ	ウクライナ語	日独同盟についてウクライナの独立にむけてポジティブに評価
45号 (169号)	1936年12月20日 (日曜日)	緑ウクライナとコミンテルン／反共産主義の夕べ	ウクライナ語	反共産主義の夕べはウクライナ民族の家で20日晚に開催
46号 (170号)	1936年12月27日 (日曜日)	1936年の結果	ウクライナ語	1936年を回顧する記事
1号 (171号)	1937年1月3日 (日曜日)	天国の神、地球の平和、人々の恵みに栄光あれ！	ウクライナ語	新年5広告。ウクライナ人居留民会、プロスヴィータ協会、ウクライナ青年連盟、ウクライナ生神女庇護教会、プロメテイ協会
2号 (172号)	1937年1月10日 (日曜日)	偉大なる日／ウクライナ民族の家で次に何があるか？／ウクライナ人居留民会のニュース	ウクライナ語	「偉大なる日」はイヴァン・スヴィットの署名記事
3号 (173号)	1937年1月17日 (日曜日)	伝統の退色／トルコからの祝電	ウクライナ語	トルコのウクライナ人居留民会からの祝電が「満洲通信編集者イヴァン・スヴィット」宛に届く。
4号 (174号)	1937年1月24日 (日曜日)	19周年～1918年1月22日～1919年	ウクライナ語	ウクライナ人民共和国独立19周年
5号 (175号)	1937年1月31日 (日曜日)	批評／ウクライナ青年連盟再編／ミコラ・ドプロボリスキー死去	ウクライナ語	ドプロボリスキーは極東で活動した俳優で天津にて死去
6号 (176号)	1937年2月7日 (日曜日)	信じない者に対する戦線	ウクライナ語	
7号 (177号)	1937年2月14日 (日曜日)	共産主義者は餓鬼だ／J. ホリエの葬儀／H. バチンスキーが任命される	ウクライナ語	J. ホリエは堀江一正(スヴィットによるとハルビン特務機関のウクライナ担当顧問)の妻。バチンスキーはウクライナ系カナダ人。マニトバ市議会議員に任命される。
8号 (178号)	1937年2月21日 (日曜日)	死刑執行人の死！／ウクライナ人という人種	ウクライナ語	「死刑執行人の死」はパーヴェル・ボスティシェフがスターリンに批判されたことについて。
9号 (179号)	1937年2月28日 (日曜日)	現存せず。		発行日は推定
10号 (180号)	1937年3月7日 (日曜日)	タラス・シェフチェンコ／ハルビンでのウクライナ人の生活	ウクライナ語	
11号 (181号)	1937年3月14日 (日曜日)	緑の櫻とコミンテルン／『ナタールカ・ポルターウカ』大成功	ウクライナ語	『ナタールカ・ポルターウカ』はウクライナ民族の家で2月11日にオペレッタとして上演
12号 (182号)	1937年3月21日 (日曜日)	人民の革命20周年／ハルビンのウクライナ人の生活	ウクライナ語	1917年の2月革命について
13号 (183号)	1937年3月28日 (日曜日)	現存せず		発行日は推定
14号 (184号)	1937年4月4日 (日曜日)	チェコスロバキアのウクライナ自治区／世界のウクライナ人の暮らし	ウクライナ語	
15号 (185号)	1937年4月11日 (日曜日)	野蛮人の王国で／ローマのウクライナ人神学校	ウクライナ語	「ローマのウクライナ人神学校」はローマにウクライナ人向けのカトリックの学校が出来たとの内容

16号（186号）	1937年4月18日 （日曜日）	今日のウクライナの出来事	ウクライナ語	
17号（187号）	1937年4月24日 （日曜日）	共産主義による苦しみ／アジアにて	ウクライナ語	「アジアにて」は中国や各地のウクライナ人団体の活動など。
18号（188号）	1937年5月2日 （日曜日）	フリストス復活！ウクライナ復活！／復活までゴルゴダを通過	ウクライナ語	復活祭7広告。ウクライナ・ホクロフシカ教区、ウクライナ人居留民会、『満洲通信』ならびにウクライナ出版組合、青島プロスヴィータ協会、アジア・プロスヴィータ協会、天津のウクライナ人、上海ウクライナ・フロマーダ
19号（189号）	1937年5月9日 （日曜日）	我々の暮らしの活性化／アジアのウクライナ人の暮らし	ウクライナ語	
20号（190号）	1937年5月16日 （日曜日）	良心に語らせてください	ウクライナ語	
21号（191号）	1937年5月23日 （日曜日）	シモン・ベトリューラ／アジアのウクライナ人の暮らし	ウクライナ語	
22号（192号）	1937年5月30日 （日曜日）	現存せず		発行日は推定
23号（193号）	1937年6月6日 （日曜日）	臆病者のために／アジアのウクライナ人の暮らし	ウクライナ語	
24号（194号）	1937年6月13日 （日曜日）	ジョージ6世からの電信／重要な出来事だ！／自分で友達を作ろう	ウクライナ語	上海のウクライナ人居留民会がイギリス国王ジョージ6世に送った手紙に対して返信があったという内容。
25号（195号）	1937年6月20日 （日曜日）	共産主義の野蛮人による苦しみ／満洲国についての外交官	ウクライナ語	「満洲国についての外交官」は満洲国について対外的に話そうという内容
26号（196号）	1937年6月27日 （日曜日）	共産主義の死／極東からのニュース	ウクライナ語	
27号（197号）	1937年7月4日 （日曜日）	年配者が若者に語る	ウクライナ語	
28号（198号）	1937年7月11日 （日曜日）	年配者が若者に語る／アジアのウクライナ人の暮らし	ウクライナ語	「年配者が若者に語る」は前号の続き
29号（199号）	1937年7月18日 （日曜日）	ウクライナ人統殺される／ウクライナのニュース／極東のニュース	ウクライナ語	「ウクライナ人統殺される」はハバロフスクの軍事裁判の結果、「スパイ」、「トロツキスト」として21人が統殺されたことについて
30号（200号）	1937年8月8日 （日曜日）	支那の情勢／極東からのニュース	ウクライナ語	

【出典】『満洲通信』通算番号1号－200号（欠号：37号，38号，41号，179号，183号，192号）

(1) 1932年【1号（8月5日，月曜日）～9号（12月19日，土曜日）】

創刊号は「日本が満洲国を承認する」の大見出しで、9月15日に日本が満洲国を承認する見通しであることや武藤信義関東軍司令官が満洲国駐在特命全權大使に就任することや関東軍参謀副長の岡村寧次少将のハルビン訪問などが非常に詳細に報じている。紙名，年号日付などはウクライナ語であるが記事はロシア語であった。発刊時に検閲は何語で行うのかが話し合われており，ハルビン特務機関や当局による検閲のためであったと思われる。9月は1号，11月は

図7 「グルジア人の暮らし—グルジアの英雄の思い出, グルジアとヨーロッパ」



【出典】『満洲通信』6号, 1932年10月15号, 4面。

まったく発刊されていない。これはスヴィットが述べているように商業広告不足と高額な印刷費によるものであったと思われる。一方, 8月12日号あたりからは, 各号8つ程度の広告も掲載されている。

10月から, ウクライナ飢饉についての記事が増え, 12月にも掲載されている。ポジティブなニュースとしては, 1933年に開幕するシカゴ万博でのウクライナパビリオンのため, リヴィウで組織委員会が立ち上がったことが報じられている。

「日本と満洲国」(8月12日号3面), 「満洲でのウクライナ人の暮らし」(同5面)といったハルビンのウクライナ人に対して, 事実上の日本統治下でどのように暮らしが変化するのかといった記事も目立つ。「グルジア人の暮らし」(10月15日号4面), 「グルジアの歴史」(12月19日号4面)といったグルジアに関する記事も多いため, ハルビンのウクライナ系とグルジア系コミュニティに繋がりがあったことが窺える。1933年6月3日号では「グルジア語の新聞発刊」といった記事も掲載されている。また創刊号からグルジア系と思われるB・M・ツェルツバトゼ商店の広告が毎号掲載されている。商店の所在地は『満洲通信』編集部ならびにウクライナ出版組合が所在したキタイスカヤ街32番地, 電話番号も同じでその関係が深かったことが分かる。<sup>(33)</sup> また, これまでイヴァン・スヴィットが切手商であったと考えられてきたが, ツェルツバトゼ商会在

図8 В・М・ツェルツバトゼ商店の広告（キタイスカヤ街32番地）

На днях будет открыт  
магазин  
**В. М. Церцвадзе.**  
тел. 32-64                      Китайская 32

**ВСЕ ДЛЯ УЧАЩИХСЯ!**  
книжный МАГАЗИН „**БУКНИСТ**“  
ГОГОЛЕВСКАЯ, № 57 против КАФЕ „МАРС“.  
Полные комплекты учебников для всех школ и классов.  
БОЛЬШОЙ ВЫБОР:  
**СУМОК, ранцев, портфелей**  
и др. ученич. и канцел. принадлежн.

**Марки для коллекций.**  
Пакеты, серии, на выбор.  
Принадлежности для коллекционеров.  
Запись на марочные каталоги на 1933 год.  
Подписка на филателист. журналы.  
Китайская 32 при маг. **В. М. Церцвадзе.**  
Тел. 32-64.

【出典】『満洲通信』1号，1932年8月5日，8面。

コレクター向けの切手販売業を営んでいたようである。

なお，1932年には，写真が掲載された記事はなかった。

(33) ただし1933年以降は同商店の広告は掲載されていない。



図9 『満洲通信』・ウクライナ出版組合（キタイスカヤ街32番地）



【出典】『満洲通信』1号，1932年8月5日，6面。

(2) 1933年【1号（1月，土曜日）～47号（56号，12月30日，土曜日）】

1933年は5月25日，12月5日，16日号の3回を除いて，すべて土曜日に発行され，前年に比べ安定した経営環境が窺える。また，5号より通算番号14号が併記されるようになり，廃刊まで続いた。引き続き，ウクライナ飢饉の記事が多くみられ，またソ連と共産主義に対する警戒感を示す記事がたびたび掲載された。ウクライナ共産党幹部のパーヴェル・ポスティシェフの演説のように，ソ連のメディアから引用される事例もあった。

カナダやフランスなど世界中のウクライナ人ディアスポラに関する記事も多い。また，ハルビンのウクライナ人の活動や生活に便利な情報も掲載された。2月18日号ではウクライナ人学校の必要性を訴えている。1933年の大きな話題は，シカゴ万博にウクライナパビリオンが出展されたことで，6回にわたり掲載された。

1933年には写真付きの記事が8つあるがそのうち，ハルビンや極東のウクライナ人に関するものは3つである。その中から2つ紹介したい。6月3日の記

図10 「小露への思慕・ウクライナ寺院」



【出典】哈爾濱鐵道局編輯（第三輯）『哈爾濱の寺院』哈爾濱鐵道弘濟會。

事ではハルビンの生神女庇護教会で、ミコラ・トゥルファニフ神父らによってシモン・ペトリューラの死後40日祭パナヒダが行われたことが報じられている。現在は中国自治正教会管轄でロシア正教会の影響が色濃い同教会だが、当時満洲で発行された絵葉書や地図などで1930年に建設され東清鉄道関係者を祀った「ウクライナ寺院」として紹介された。ペトリューラの式典を執り行っていた事からは少なくとも1930年代の前半は民族意識の高いウクライナ人を中心として同教会が運営されていた様子が窺える。『満洲通信』にもハルビン市ウクライナ・ポクロフシカ教区（Українська Свято-Покровська парафія в м. Харбіні）や同信徒会の名の下に広告が降誕祭や復活祭に掲載されている事からもウクライナ人教会であったことが裏付けられる。

11月18日号の「私たちが必要とするもの」と題された記事は、ウクライナ民族の家についてである。記事ではまず、通称「ウクライナ・クラブ」と呼ばれ



図11 「シモン・ペトリューラのパナヒダ」



【出典】『満洲通信』13号（27号），1933年6月3日，2面。

たこの施設が日本当局によって公式に使用が認められたと書かれている。また、この建物を管理するのが「ウクライナ人居留民会（非ポリシェビキ系）」と書かれていることから、ソ連系ウクライナ人の存在と居留民会のウクライナ人意識の高さが窺える。

ハルビンのウクライナ人が必要とするものとして挙げられているのは以下の

8点である。

1. ウクライナ語によるウクライナ人学校の組織
2. ウクライナ人教員養成クラス
3. 貧しいウクライナ人や孤児の収容施設
4. ハルビンのウクライナ人の生活や情報についての独自の印刷物の広範な配布
5. ハルビン近郊と鉄道におけるウクライナ人のコミュニティとサークルの組織化
6. 展覧会，夜会，コンサートなどが実施できる文化・教育団体
7. ウクライナ銀行の設立，または低利子で預金者に融資する貯蓄銀行
8. あらゆる種類の最も安い商品を加入者に販売するウクライナ人の協同組合組織

4のウクライナ人独自の印刷物配布については「満洲の他のすべての外国人が独自の印刷物を持つがウクライナ人にはない」と記されている。1937年に外務省情報部が編纂した『満洲国及び支那における新聞』にも『満洲通信』についての記載はなく、<sup>(34)</sup>現地では発行の許可証は出ていたものの、その不安定な立場が窺える。

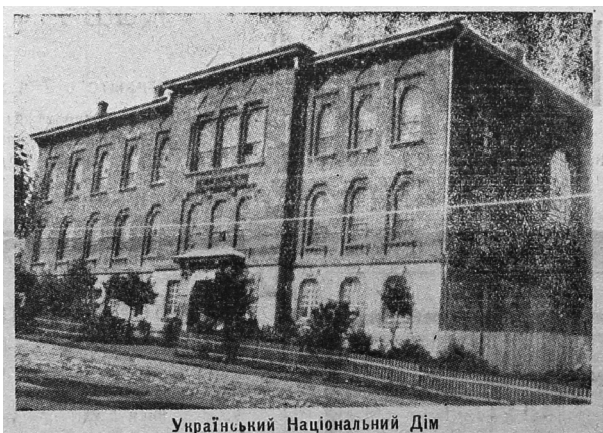
(3) 1934年【1号（57号，1月6日，土曜日）～36号（92号，12月18日，火曜日）】

1934年の発行日は、土曜日を中心に日曜日，月曜日，火曜日と安定していない。まず，この年から極東ウクライナ人居住区の呼称として「緑の楔」ではなく「緑ウクライナ」が使われることが増えた。各国のウクライナ人の活動について詳しく報じられるとともに，ハルビンのウクライナ関係団体の記事が増え

---

(34) 外務省情報部編『秘：昭和12年版満洲国及び支那に於ける新聞』外務省，1937年。

図12 ウクライナ民族の家



【出典】『満洲通信』42（51号），1933年11月18日，3面。

ている。1月6日号の「ハルビンのウクライナ人組織の日本軍事使節への訴え」はロシア語で書かれている。他の記事はウクライナ語で書かれているので、ハルビン特務機関関係者が読むことを想定したためと思われる。ウクライナ民族主義的な啓蒙活動を行ったプロスヴィータ協会ハルビン支部、ウクライナ移民連盟、ウクライナ青年連盟「緑の楔」、ウクライナ教員連盟の4団体の代表者の連名である。内容は、ロシア・ファシスト系の新聞『ナーシ・プーチ』21, 22, 23, 26号に掲載された「挑発的な記事」に対する抗議声明である。ロシア人側の主張は不明だが、少なくともハルビンのロシア人とウクライナ人の間で緊張関係があったことが窺える。

3月31日号の1面ぶち抜き記事は、3月25日のハルビン放送局におけるウクライナに関するラジオコンサートについてである。「極東初」の快挙として報じられ、その放送内容は、タラス・シェフチェンコの特集で、『遺言』を始め4つの合唱、2つの独唱、3つの報告、朗読などが含まれ、スヴィットも「アジアのウクライナ人」という題で話している。

6月23日号に、ハルビンのプロメテイ・クラブについての記事が掲載されて

いる。1932年の夏頃、ハルビンのウクライナ人、タタール人、グルジア人の間でプロメテイ・クラブを組織するというアイデアが出された。これはギリシャ神話のプロメテウスを専制的な権威への抵抗の象徴として、ユゼフ・ピウスツキがロシア帝国への抵抗やその解体を唱えたプロメテイズムに立脚した団体であった。たびたび準備会合が催され、憲章が承認され、理事会が設けられた。プロメテイ・クラブの本部の許可を経て1932年11月11日に正式に設立された。<sup>(35)</sup>同クラブを通じてウクライナ人、タタール人、グルジア人の関係が強化された。

8月27日号には、ハルビン特務機関長であった小松原道太郎少将の送別会が20日に日滿倶楽部で開催されたことが報じられている。『満洲通信』を代表してスヴィットが招待された。同紙とハルビン特務機関との蜜月関係を窺わせる内容である。

1面記事で、満洲の国内情勢について報じられることは『満洲通信』の発行期間を通じて多くはなかったが、3月3日号では、溥儀の皇帝即位を祝う記事、9月29日号では「来たる満洲帝国の新時代」と題した好意的な評論が掲載されている。

この年の1面に頻繁に登場したのは『ナタールカ・ポルターウカ』についてである。10月8日にはウクライナ民族の家で400名ほどの観客を集めてイヴェン・コトリャレウシキー原作の戯曲として上演<sup>(36)</sup>、12月23日にはミコラ・リセンコ作曲のオペレッタが上演された<sup>(37)</sup>。また、1935年からキエフ映画製作所（ウクライナフィルム）によって映画制作が始まることも報じられている<sup>(38)</sup>。

1934年には写真付きの記事が3つのみで、タラス・シェフチェンコの肖像のほか、全ウクライナ人極東会議の組織者の一人であったドミトロ・ボロヴィクに関するもので、ハルビンのウクライナ人の生活が分かるものはなかった。

(35) Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 116.

(36) 『満洲通信』33号（89号）、1934年10月22日、1面。

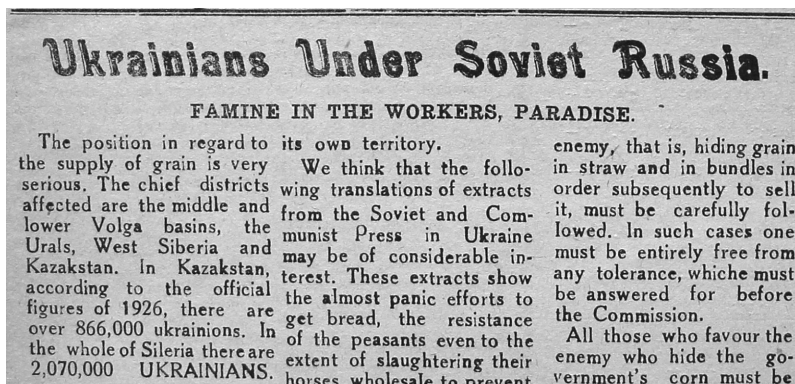
(37) 『満洲通信』36号（92号）、1934年12月18日、1面。

(38) 『満洲通信』34号（90号）、1934年11月13日、1面。

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

英語記事の事例も紹介しておきたい。1月20日号の「ソヴェト・ロシアのウクライナ人—労働者の天国における飢饉」と題された記事は、ロンドンに所在したロビー団体ウクライナ・ビュローから発信されたものである<sup>(39)</sup>。ソ連系メディアの記事も引用しつつ、ヴォルガ川下流域、西シベリア、カザフスタンで飢饉が発生し、そこに居住する207万人あまりのウクライナ人が苦境にあるとされている。ソ連政府の援助はあるものの実効性が疑わしいとされるとともに、ウクライナでは集団化によって農民が抑圧されているとの内容である。この時点では、ウクライナで大規模な飢饉が発生しているとの明確な記載はなかった。

図13 英語記事の例：「ソヴェト・ロシアのウクライナ人—労働者の天国の飢饉」



【出典】『満洲通信』2（58号）、1934年1月20日、3面。

(39) Ukrainian Bureau (Українське Бюро)。1931年にウクライナ系アメリカ人ジェイコブ（ヤキフ）・マコヒンによって設立。Ukrainian Bureau Bulletinを発行した。アングロ・ウクライナ委員会の設立にも貢献したが、第二次世界大戦が始まり活動が制限され1940年に閉鎖。Ukrainians in the United Kingdom Online encyclopaedia (URL: <http://www.ukrainiansintheuk.info/eng/03/ukrbureau31-e.htm> 最終閲覧日：2020年5月8日)

（4）1935年【1号（93号，1月1日，火曜日）～33号（125号，12月16日，月曜日）】

1935年は，月曜日6回，火曜日6回，水曜日1回，木曜日2回，金曜日2回，土曜日8回，日曜日3回と発行日がまったく定期的ではない。スウィットは1935年頃から日本当局の検閲が厳しくなったと述べており，不定期発行の大きな理由であったと思われる。他の理由としては，1935年はハルビンのウクライナ人コミュニティの統合が模索された時期であり，その会合や集会の前後に合わせて発行されたとも考えられる。またウクライナ人居留民会設立の動きが出た年でもありスウィットも深く関与していたことも影響を与えたかもしれない。

1935年5月（4月と誤植）19日号によれば「満洲帝国ウクライナ人居留民会」の設立総会が同日にウクライナ民族の家で開催予定であった。しかし，次号（5月25日発行）では，その結果は1面記事ではなく，2面の「世界のウクライナ人の暮らし」のあと，3面に「世界のウクライナ人の暮らし」の欄に副題で「1935年5月19日（日曜日）の満洲国（ハルビン）におけるウクライナ人居留民会の構成員会議」として掲載されている。満洲国外交部が編纂した「満洲のウクライナ人」によれば，この総会ではウクライナ独立派と帝政ロシア復興派が，組織の方針を巡って対立し，思ったような成果は得られなかった。それを示すように，記事には「ウクライナ人居留民会は火薬庫の上に」との小見出しが付けられている。

海外で活発化するウクライナへの支援活動についての記事も増えている。イギリス・ウクライナ委員会が，16日にロンドンのサヴォイ・ホテルでレセプ

---

(40) 岡部「満洲における〈ウクライナ運動〉—忘却された日本—ウクライナ関係史—」151～152頁。

(41) Anglo-Ukrainian Committee (Англо-український комітет). 1935年から1938年まで存在した非公式の組織で，イギリスの自由主義的政治家とウクライナを支援する活動家などで構成された。Ukrainians in the United Kingdom Online encyclopaedia (URL; <http://www.ukrainiansintheuk.info/eng/03/aucomm1935-e.htm> 最終閲覧日：2020年5月4日)

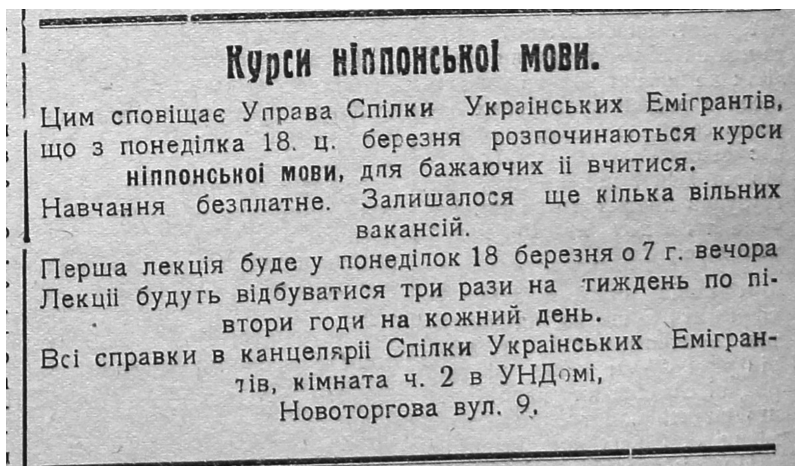


『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

ションを開催し、デイリーメール、タイムズ、モーニングポスト各紙を始めとするイギリスの主要メディアも集まる中で発足したことが4月19日号1面で大きく取り上げられている。

9月8日号には「歴史的な出来事」との見出しが打たれている。記事の内容は、ロシア帝国の鉄道敷設から35年を経て、大連からハルビンまで運転区間が到達したことである。9月1日午前には「超特急アジア号」が大連から到着した。スヴィットは南満洲鉄道関係者との繋がりが深く、鉄道への関心の高さが窺える。

図14 「日本語クラス」



【出典】『満洲通信』7号(99号), 1935年3月16日, 1面。

1934年に引き続き、ハルビンのウクライナ人が、日本人や他の少数民族とも関係を深めようという動きもあった。まず、ウクライナ民族の家では、初めての日本語クラスが開講された。主催はウクライナ移民連盟で、初回は3月18日月曜日の夜、週3回開講され、1回の講義は90分、費用は無料であった。スヴィットによれば、講師は2人の日本人で、そのうちの1人はウクライナの問題に関心があるジャーナリストで、のちにウクライナ語を学んだ。<sup>(42)</sup>

図15 ウクライナ青年連盟の会合



【出典】『満洲通信』27号（119号），1935年10月10日，2面。

写真が入ったのは9記事，そのうちペトリューラなどの肖像写真，またカザフ系ソ連政治家で外交官のナジル・テュリャクロフが東京モスクの初代イマームを務めたアブデュルレシト・イブラヒムと一緒に写った写真を使ってコミンテルンの活動実態について書かれた記事を除いて，ハルビンのウクライナ人の生活が分かるものは1記事である。1935年，ハルビンにはウクライナ青年連盟（Спілка Української Молоді，СУМ）とウクライナ青年組織「緑の楔」<sup>(43)</sup>があった。1935年10月10日号に掲載された「ウクライナ青年連盟の暮らし」では，それまで2つ存在していた青年組織を統合することが6月28日に決定し，7月6日にはプロメテイ・クラブやグルジア系クラブも招いて会合を催した。またその主

(42) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945...* - С. 153.

(43) *Так само...* - С. 205.



『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

な活動はプロスヴィータ協会とも協力して文化的な教育活動を行うことであった。

(5) 1936年【1号(126号, 1月1日, 水曜日)～46号(170号, 12月27日, 日曜日)】

この年は前年と違い1, 2号をのぞきすべて日曜日に発行され, 安定した経営環境が窺える。

1936年の紙面にはプロスヴィータ協会の活動に関するものが多く, 7記事が1面に掲載されている。1月16日には「次に何が?」というプロスヴィータ協会主催の報告会が開催された。<sup>(44)</sup>1935年5月の居留民会設立などにも触れ, 満洲でのウクライナ人がどの道を進むべきかが話し合われた。1月23日に「マサリクのプロスヴィータ思想」という題で報告会,<sup>(45)</sup>4月30日には「愛国心」という題の集会,<sup>(46)</sup>5月31日にはコンサート開催などさまざまな文化的活動が行われたことが分かる。ハルビンのプロスヴィータ協会がウクライナ人の日常の教育や文化活動に果たした役割の大きさが窺える。また, 12月6日号では「プロスヴィータの母に栄光あれ」と称され, ウクライナ人居留民会が内部対立を抱える中でプロスヴィータ協会の活動が, この時期のハルビンのウクライナ人に大きな影響があったことが分かる。

1935年5月に, 不安定なまま結成されたウクライナ人居留民会であったが, 5月17日号, 6月7, 14, 21日号には居留民会総会を前に団結を訴える記事があり, 6月18日に総会が開かれ, Φ・ザイカ, B・フェドレンコ, IO・ロイらが新ラーダ(指導部)に選出された。<sup>(48)</sup>1935年以降, 多くの号数でウクライナ人

---

(44) 『満洲通信』3号(128号), 1936年1月19日, 1面。

(45) 『満洲通信』4号(129号), 1936年1月26日, 1面。

(46) 『満洲通信』12号(137号), 1936年5月3日, 1面。

(47) 『満洲通信』13号(138号), 1936年5月10日, 1面。

(48) 『満洲通信』19号(143号), 1936年6月21日, 1面。なお『東亜政情』の1935年のウクライナ人居留民会の指導部名簿と比べれば半数ほどが交代している。

居留民会関連記事が掲載されているが、その総会の議事や具体的な発言、あるいは写真は掲載されていない。11月15日号に「ユダとユダ」と題された評論が掲載され、満洲のウクライナ人の立場の違いや「ウクライナ人のユダ」との表現で内部対立が示唆<sup>(49)</sup>されている。

8月16日号では、ウクライナ人学校の計画が進まないと書かれている。ウクライナ民族の家では、15～20名ほどのウクライナ人生徒のための予算が計上されているものの、ハルビンの何千ものウクライナ人に対しては不十分であり、開学に向けてウクライナ人の具体的な行動と支援を求めている。

1936年のハルビンのウクライナ人コミュニティでも話題となったのは映画『ナタールカ・ポルターウカ』の制作開始である。1934年の紙面でもソ連版の制作が話題となったが、10月11日号ではウクライナ人のヴァシル・アブラメンコとアメリカ人のエドガー・G・ウルマーが共同監督で9月2日からクランクイン<sup>(50)</sup>したことが報じられている。

この年初めて掲載された追悼行事があった。11月22日号には、その日にウクライナ民族の家で、1921年11月21日のジトミール州のバザール村でウクライナ人民共和国軍の359名の兵士が赤軍に銃殺されたことに対する追悼集会が開催<sup>(51)</sup>されることを報じている。

12月6日号には満洲国がイタリアに承認されたこと、13日号には「ウクライナの立場～日独同盟とウクライナ」との題の評論と、日満の外交政策に関わる記事が続けて掲載されている。後者はこれまでの宇独関係も振り返りつつ、日独同盟がコミンテルンとの闘いに対する光であるとまとめている。

1936年の『満洲通信』にウクライナ人の暮らしが分かる写真入りの記事は1点のみで、9月13日号に「ウクライナ出版の展覧会」と題された記事である。スウィットによれば、1936年8月25日、ウクライナ青年連盟は、秋のパー

---

(49) 『満洲通信』40号（164号）、1936年11月15日、1面。

(50) 『満洲通信』35号（159号）、1936年10月11日、1面。

(51) 『満洲通信』41号（165号）、1936年11月22日、2面。

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

ティーを開いた。その際に、ロシア革命以来のウクライナ出版物の90以上のコレクションが展示され、その後、『満洲通信』編集部に引き渡された。<sup>(52)</sup>

図16 「ウクライナ出版の展覧会」(写真左はイヴァン・スヴィット)



【出典】『満洲通信』31号(155)号, 1936年9月13日, 2面。

(6) 1937年【1号(171号, 1月3日, 日曜日)~30号(200号, 8月8日, 日曜日)】

この年も全号日曜日に発行されており, 安定している。検閲が受けられず販売できなかった最終号の200号は, 8月8日発刊であった。

この年の1面記事には評論が多い。その内容は, 1月17日号の「伝統の退色」ではウクライナ・アイデンティティーやウクライナ人への祖国愛が薄れていると論じ, 7月4日号, 11日号では「年配者が若者に語る」と題して, 年配の

---

(52) *Світ І. Українсько-японські взаємини 1903-1945... - С. 206.*

識者からの投稿を掲載し、その内容は若い世代のウクライナ人意識の希薄化を危惧するというものであった。一方、ウクライナ文化の活動も継続して行われている。2月11日に、ウクライナ民族の家で、『ナタールカ・ポルターウカ』のオペレッタが上演され大成功を収めた。<sup>(53)</sup>

3月21日号に掲載された「人民の革命20周年」と題された評論は、ハルビンのウクライナ人のメンタリティーを知る上でも興味深い。1917年の2月革命を、ロシア帝国を倒し、ウクライナの独立をもたらした人民による革命と評価し、一方、10月革命を起こした社会主義者、共産主義者、ポリシェヴィキによって作られたソ連は、ロシア帝国の後継国家で抑圧的であると断罪している。またロシア移民とウクライナ人の差異も強調しながら、「ウクライナ国家の復活を信じる」と結んでいる。

1937年には、満洲外のウクライナ人組織などとの連絡も活発化していた。トルコのウクライナ人居留民会のM・ザベロ会長からの新年を祝う電信が「満洲通信編集者イヴァン・スウィット」宛に届いた。<sup>(54)</sup>「重大な出来事」として報じられたのは1937年6月13日号の「ジョージ6世の電信」である。ジョージ6世の即位に対して、上海のウクライナ人居留民会が祝電を送ったところ5月15日にジョージ6世、エリザベス王妃連名での返電が返ってきた。

なお、1937年には写真が掲載された記事はない。

#### 4 むすび

満洲のウクライナ・ディアスポラについて一次史料を用いた研究は、ウクライナにおいてもほとんど行われていない。本稿では、『満洲通信』を用いて、ハルビンを中心に満洲のウクライナ人の実態を分析した。そこから浮かび上がってきたのは、ハルビンには、これまで一括りにされていた「白系露人」の中に、ウクライナ人の一大コミュニティが存在していた可能性である。さまざま

---

(53) 『満洲通信』11号(181号)、1937年3月14日、1面。

(54) 『満洲通信』3号(173号)、1937年1月17日、1面。

『満洲通信』に見るハルビンのウクライナ人 1932-1937年

まなウクライナ文化行事や親睦活動が行われ、また、グルジア人を始めとする他の在満少数民族との連携も活発であった。それは、ハルビンのロシア人社会や白系露人事務局周辺とは、まったく異なるもう一つのストーリーといってもよい。満洲国、そしてその背後にいる日本当局によって、ウクライナ問題の研究が詳細に行われていたことからその勢力と影響力の大きさが窺える。

一方、『満洲通信』の評論などから、ハルビンのウクライナ人社会では、個人や団体によってその民族意識に大きな温度差があったことも分かった。1935年以降、多くの号で1面を飾ったウクライナ人居留民会であるが、その総会の議事や具体的な発言などについてはまったく報じられておらず、ハルビンのウクライナ人社会の最大勢力であったとは言い切れない。またウクライナ移民連盟といった類似の組織も影響力があったことから、ハルビンのウクライナ人社会は一体ではなかったと考えられる。

ハルビの特務機関が、検閲が難しいウクライナ語の新聞の発刊を許していたことは、非常に興味深い。当初『満洲通信』がロシア語のみで発刊していたのは、検閲を行った満洲・日本当局への配慮と思われるが、その後はウクライナ語の記事がほとんどである。そこからは少なくとも1937年まで、ハルビンの民族意識の高いウクライナ人と日本当局が密接な関係にあったことが窺える。

『満洲通信』の紙面には満洲国についての記事は多くはないものの、溥儀の即位や帝政への賞賛が掲載され、そこからは満洲国民としてのウクライナ人といった意識も垣間見える。たとえ日本の傀儡国家であっても、ロシアでも中国でもない満洲国で、ウクライナ独立を夢見て力強く生きるウクライナ人が多数いた。また、それぞれの思惑は異なるが、堀江一正を始めとして彼らの活動を陰ながら支えた多くの日本人もまた存在していたのである。

## Ukrainians in Harbin through the ‘Manchurian Herald’, 1932-1937

Yoshihiko Okabe

### Abstract

Little was researched on the Ukrainian diaspora in Manchuria using primary sources. In this paper, I analyse the actual situation of Ukrainians in Harbin, using the Ukrainian weekly newspaper ‘Manchurian Herald’, published in Harbin from August 1932 to August 1937.

This analysis showed the possibility that a large Ukrainian community existed in Harbin, among the ‘white émigré’. Furthermore, it was found that a large temperature difference in nationalism was present in Harbin’s Ukrainian society, depending on individuals and groups. It is believed that Harbin’s Ukrainian society was more than one. The fact that the Japanese Military Mission in Harbin allowed the publication of Ukrainian newspapers, which were difficult to censor, suggests that until at least 1937, Harbin’s nationalistic Ukrainians and Japanese authorities in Manchuria had a close relationship.

Even in Japan’s puppet state, Manchukuo, which is neither Russia nor China, there were many Ukrainians who dreamed of Ukraine’s independence and lived powerfully. Moreover, many Japanese supported their activities behind the scenes.

**Keywords:** Ukrainian diaspora, Ukrainians in Harbin white émigré, relationship between Japan and Ukraine, Manchuria.

---

Yoshihiko Okabe, Ph.D., professor, faculty of economics, Kobe Gakuin University.  
President, Japanese Association of Ukrainian Studies.

okabe@eb.kobegakuin.ac.jp